

(一)モ、首里
天加那志美
御前の御事
(二)モ、悪世
之事
(三)モ、善世
之事

校訂おもろさうし

うる世しと、なおちへ、
うらごよむ、まちらそ、つけれ
又せるしまよ、あつる

(五〇) たつながふし

一となくそく、おむる
みかなしの、てだの、
にがよう、あま、よ、なす、てだ
又くよのねよ、おむる
又人の、うらの、よぎや、よ、
むがうらの、あま、よ、
よぎや、よ、あま、よ、なす、てだ

こめすおもろの御さうし

天啓三年 癸亥 三月七日

(一) 素よりちよむちへがふし

一くめを、よの、ぬしの、

きみ、くらよ、

きみくらを、

あんじ、そやせ

又まもん、よの、ぬしの

(二) うらおそいふし

一いしやら、たうぐすく、

ゆかる、たう、ぐをく、

かみ、てだの、

まぶり、ゆをる、ぐをく

又いしやら、よの、ぬしの、

げらへ、たる、御ぐをく

又いくさ、よせる、まし
かたき、よせる、まし

(三) あおりやへがふし

一よたましぎや、おもしろ、
おかう、かなしけ、
を原、ながく、

よう、もち、よむれ

又いしやら、世の、ぬしの、
まもん、よの、ぬしの

(四) うらおそいふし

一まぶよ、いし、ぐせく、
まぶよ、かな、ぐせく、
あまつかり、あいつまよ

又くろかむの、よろい、いきやかせ、
いと、とうしよ、みなち

(五) ちやうやかへましがふし

一とひら、あつる、みこし、
ねくよ、あつる、つるぎ、
よ、そいの、みこし原、
まだまど、てりよる

又ふくじあつる、みこし、
ねくよ、あつる、つるぎ

(六) うらおそいふし

一とひら、もり、ぐせく、
いしとすと、こので、
よき、あかりまよ、

校訂おもしろさうし

てづて、ふさよむれ

又ねくま、もりぐま

(七) てくらんのたらちへがふじ

一やまき、たらちへへ、

よかる、たらちへへ、

おかう、またりやが、きよらや

又けおの、よかるひよ

けおの、きやくろひよ

又やまぐま、おむる、

いちへき、きよら、あんじの

(八) やまきふじ

一やまき、たらちへへ、

よかる、たらちへへ、

(一)モ、山内
の小名

もくと、ちよむれ、みおどん

又まよせと、つくて、

さよせと、つくて

(九) やまきふじ

一やまき、たらちへへ、

よかる、たらちへへ、

いちの、なよりきよ、てづて

又けおの、よかるひよ、

けおの、きやくろひよ

又月と、まくら、まよむちへ、

てだと、こしやて、まよむちへ

(一〇) やまきふじ

一やまき、たらちへへ、

校訂おもしろさうじ

よかる、たらをさへ、

もゝま、ひき、よせる、むし

又けおの、よかるひよ

けおの、きや／＼ろひよ

(一一) やまきふじ

一やまき、たらをさへ、

よかる、たらをさへ、

あやより、くせよりが みもん

又やまぐま、おむる、

いちへき、きよら、あんじの

又きみよしが、またま、

よぼこりぎや、まへよ

(一二) やまきふじ

(一)モ、参會

一やまき、たらをさへ、

よかる、たらをさへ、

おとぢや、いきやへ、まよむちへ、

ともゝこの、おぼこり、まよむちへ

又けおの、よかる、ひよ

けおの、きや／＼ろひよ

又あしかむ、ちよむちへ、

くもさうだ、ちよむちへ

(一三) やまきおもしろのふじ

一やまきし、まぎべし、

うちよせれ、かきよせれ

又かねぐま、むがおや國

(一四) まじかないのふじ

一やまきしぎや、

まざべしぎや、おもう、

あがる、もちつき、

きみの、きよらや

又ふくじ、お見る、

ねくよ、お見る、

よのぬし

(一五) (あがるもちつききみのふじ)

一やまきよやが、

まざべしぎやおもう、

よし、かない、よせて、また、

よく、まさる、ひが、かない

まへ、よせて、ちよけれ

又ふくじ、お見る、

ねくよ、お見る、
世のぬし

(一六) たまぐまぐあまつゝがふじ

一やまぐまぐ、げらへ、きよら、もりよ、

くよよせ、げらへる、きよらや

又ましや、かぞよ、さり、よこう、まぢへ、みよれと

又あかぐちやが、せるまゝが、ゆいつき

(一七) やまきふじ

一やまき、たらまきへ、

ゆかる、たらまきへ、

おや、おもひぐじ、

おもひ、まよむちへ、

系、け、ほこら

校訂おもしろさうし

又大ざどの、てだど、

おゑを、世の、ぬしと、

(一八) きたたんのよのぬしがなし

一やまぐまぐ、たゝみきよ、

まちやよま、けまれ、いしらこ、

けすたる、きよらや

又いし、おう乃、こので、

かな、おうの、こので

(一九) うらおそいふし

一やまぐまぐ、たゝきよ、

かみ、まぢや、そろて、あまへ

又いちへの、なよりきよが

(二〇) うらおそいふし

一せやるくよ、おそいぎや、

おゑさと、もり、おれむちへ、

もゝご、あがり、

ふみ、あがて、ちよむれ

又けう、有くよ、おそいぎや、

又けおの、よかるひよ

けおの、きや／＼ろひよ

又なおりよと、さだけて

あまへよと、さだけて

(二一) ふるげむのろのふし

一きこゑ、おゑざごよ、

うらこやの、せるむ

又ごよむ、おゑざごよ

(一)モ、石垣

(二二) ふるげむのろのふし

一 きこゑ、うゑざと、もりよ、
やちや、みつめ、てだ
又 だよむ、おゑざとよ

(二三) たよんなりみねがふし

一 まかび、たう^アひよもい、
ゑかう、よきやか、
おかう、ならて
又 大ざこの、てだよ、
さくら、いろの、てだよ

(二四) あおりやへがふし

一 まかび、おゑる、ね國、おゑる、よのぬし、

もゝまま、ままうちちへ、ごゝやけれ

又 まかび人、ゑらび、よゑちへ

又 おきて、ゑらび、よゑちへ

又 なは、みなと、とし、むたちへ、みちへ、むたちへ

又 など、むたて、いなそ、みね、よど、まよむ

(二五) あおりやへがふし

一 きこゑ、大ざとよ、ころ、まな、

たまむより、よれ

又 だよむ大ざとよ

(二六) あおりやへがふし

一 きこゑ、大ざとよ、

きこゑつくし、ちやら、

とやり、ふさゆむれ

又ごよむ、大ざごよ

又ごよむ、つくしちやら

(二七) もゝごふみあがりかふし

一大ざごの、てだの、

てだ、きよら、あんじの、

みかなし、てだ

又さくら、いろの、てだよ、

まだま、いろの、てだよ

(二八) あおりやへがふし

一あかま、きみおそいや、

みやかねより、もりよ、

かみ下、そろて、みおやせ

又きこゑ大ざごよ

又ごよむ大ざごよ

(二九)

一きこゑ、大ざごよ、

たまの、みつまじり、

もゝつれ、ぬちへ、

もろちへ、みおやせ

又ごよむ、大ざごよ

又こしやて、なつこもい

(三〇) あおりやへがふし

一きこゑ、大ざごよ、

みもんをる、あまび、

ごよめを、み(る)まが、まさり

又ごよむ大ざごよ

又ごもゝそが、なかま、
やもゝそと、ゑらで

(三二) げらへびやうぶがふし

一大ざこの、げまの、おもひ、あぢ、
かみ、てだよ、つほこ、ゑやり、ちよとれ
又ゑまじりの、げまの

(三三) あおりやへがふし

一大ざこの、ごよみ、もりぐま、
よがけとれし、ごりよとちやる、まさり
又さまかさが、きみの、あんじの、かねごり
又な(三)かべ、つちへ、く(三)もい、つちへ、ま(三)う、ご(三)り

(三四) うらおそいやさけごあるながふし

一大ざごと、みきくよ、
ゑ、け、よ、そとて、ちよとれ
又大ざごの、さけくよ、

(三五) きせのしがふし

一かねぐま、のろの、
まぶり、よとる、おごまさり、
やぐめさ、やまご、いくさ、よせらや
又くよかねの、のろの

(三六) おもたかふし

一がなと、ごよみ、みちや、
とれしけ、くまたかの、
やり、ふさよとれ
又うらさきよ、ごよみ

(一)モ、空ニ
(二)モ、雲ノ
(三)上ニ付
(四)モ、飛鳥

(三六) うらおそいふし

一がなともり、

ごよみ、もりぐをく、

なよせりきよ、

まきよの、かき、

てと見いへ

又あかか かいたまが

かいおごちやむ

又ぬまご、みやま、

くご、みやま、

とたらめ

(三七) まよりま人のふし

一つるこ、よくけ、

よかる、よくけ、

きよらや、ほこら

又がなと、おきて、

ごよみ、おきて

又あさね^{ア、キ}なの、さまさき

又まこ、ひきやり、

かちや、さげて

又あちと、つかい、

ちやらと、つかい

(三八) うらおそいふし

一うらさきの、たいらよ、

つゝみ、うちちへ、あまべと、

ゑのし、たいらし、さらめ

又さきよだの、たいらよ

(三九) うらおそいふし

一よしの、よのぬし、

大みねの、つかい、

あまゑて、^(三)か、ちよ^(三)べれ

又けおの、よかるひよ

又けおの、きやく^(三)ろひよ

(二)輝

(四〇) あおりやへふし

一大きてが、おもしろ、

まま、よりや、まさり、

かくしかね、みちやる

又たらこもいが、おもしろ

又ましけつよ、ちよ^(三)べちへ

(四一) さむちへきよがふし

一やらざ、大つかさ、

あがころよ、みまぶて、

かぐら、ぎやで、ごよで

又やらざ、^(三)かつかさ

又せいくさ、おしたてと

又^(三)とらおしたてと

(四二) ふねたてむがふし

一あかのこが、大ざと、いちへ

大里の、おもひ、いちへの、てだ

又ねこのこが、ままじりよいちへ

又まろつもい、ましい、みちやる

(一)モ、いく

八の四五

(一)モ、惣様の
のこと

(四三) ふねたてまがふし

一あかのこが、ねそのこが、
も、ちやらの、ぶれ、おもひ、てだ
又大ざごと、ささからる
又かでしがえ、みづからる

首里大さみぎやおもろのさうし

(以下七ふしハ六ノ首里大さみぎやおもしろさうしニ同シ、四トセシハ、第四ノあおりやへ
さすかさのおもしろ双紙ニ出テタルモノト校合セシニ)

(四四) あちおそいまよよじれがふし

一まより大さみぎや、
とよむ、くよおそいや、
くよ、ふさて、ちよむれ

六の一
四の五
一の四
五

(六)ノト大方
同シ、唯やハ
あか、ちなるハ
てハ、か、なら
てハ、から、
ハ、ゆ、か、
ハ、や、な、
て

ハ、又、
カケタルトコ
ヲ添ヘテ別字
ニ立テタリ

(一)モ、明年
ならばと云
(二)モ、明年
異名ニ

又けおの、うちよもどて

●●ちる、うちよ、もどて

又なさいきよもい、あちおそい、

「なさいきよもい、たゝみきよ

又あまこ、あむちへ、ならて

又あけま、どし、ならえ、

「むかう、どし、ならえ

又きみてつり、ほこれ、

かみつかい、このめ

又けおごまよ、よりおれや、

又かゑらびの、よりおれ、

又よりみちへが、おより、

せちよせが、なおさ

又おれらかた、まぶら

あまをかた、かいなでら

校訂おもしろさうし

(四五)

一 志より、大きみぎや、
 志、 志らびやり、 おれむちへ、
 きみぎや、 せぢ、
 もちよる、 なちへ、 みおやせ
 又 志よむ、 くよもりぎや、
 ませ志らびやり、 おれむちへ
 又 志よりもり、 ちよむる、
 志ぞよや志へ、 あんじおそい
 又 まだまもり、 ちよむる、
 てだが志へ、 あんじおそい
 又 みもん、 うちの、 まみやよ、
 くよあかりと、 あふらちへ
 又 かむるめの、 みうちよ、

きみ志ない、 あふらちへ
 又 きこへ、 大きみちよ、
 志りちよ、 やりかむちへ

(四六) あおりやへがふし

一 志より大きみぎや、
 この志りの、 よりおれや、
 志へよ、 ぎやめ、 まちよく、 ちよむれ
 又 志よむ、 くよおそいぎや、
 このきらの、 つきおれや
 又 たよみきよ、 きも志へて、 あまで、
 又 みもん、 きよら、 あふらちへ、
 おぼつ、 たけ、 より、 きちへ
 又 くよふさい、 おしたて、
 かぐらもり、 ひらちへ

四の五七
六の四

校訂おもしろさうじ

又 大きみよ、よしられ、
てるかはよ、のだてれ

(四七) あおりやへふじ

一 志より、大きみぎや、
志よりもり、おれむちへ、
あんじおそい志よ、
せぢ、まさて、ちよむれ
又 志よむ、きみとよみぎや、
ませねかて、おれむちへ
又 あまみやから、
まゑの、きみ、やれと
又 志ねりやから、
あいちへきみ、やれと
又 志しふ、五ころよ

(二) 神人

(二) 神人異名

(三) 御了簡

四の五八
六の五
十二の九三

(四) 及び六ニ
ハ萬曆三十五
年云々ノ序アリ

(一) モ、御爲

みまぶて、おれたれ
又 志つき、七ころよ、
かいなでて、おれたれ
又 大きみぎや、おさうせ、
てるかえ、のだて

(四八) あおりやへふじ

一 志より、大きみぎや、
志よりもり、おれむちへ、
あんじおそい志よ、
せぢ、まさて、ちよむれ
又 志よむ、くよおそいぎや、
まだまもり、おれむちへ、
又 あんじおそいが、おより、
むうよせが、おより

校訂おもしろさうし

又きらのかた、おれむちへ、
又かのかた、おれむちへ
又おれらかた、みまぶら
あまをかた、みまぶら

(四九) あおりやへふじ

一きこへせんきみぎや、
なりきよ、おれふさて、
なさいきよもい、むうよせ、
せぢ、まさて、ちよむれ
又とよむ、きみ、とよみぎや、
いけな、おれなむちへ
又みもん、うちの、まみやよ、
あまで、なむちへ、からと、
又かむるめの、まみやよ、

四の五九
六の六
十二の八八
(四及ビ六ニ
ハハハ三ツ共見、
モハハハ又萬
曆十五年云々
ノ序アリ)

又ほこて、なむちへ、からい、
又さしふ、五ころよ、
おれなむちへ、からい、
又もつき、七ころよ、
みまぶてま、おれたれ、
又あよりもり、ちよむる、
あが、なさいきよ、むうよせ、
あまながく、せぢ、まさて、ちよむれ
又まだまもり、ちよむる、
あが、なさいきよ、むうよせ

(五〇) あおりやへふじ

一きこゑせんきみぎや、
まへとまへて、おれむちへ、
あんじおそいよ、

四の六〇
六の七
十二の九四
(四及ビ六ニ
ハ萬曆三十五
年云々ノ序ア
リ)

校訂おもしろさうし

去^{ア、ガ}まる、いのち、みおやせ

又 ごとよむ、きみごとよみぎや、

ませねかて、おれむちへ、

又 あまみや、から、

を^四ゑの、きみ、やれと

又 去ねりや、から、

あいちへ、きみ、やれと

又 さしふ、五ころよ、

みまぶてを、おれたれ

又 むつき、七ころよ、

かいなでてを、おれたれ

又 大きみぎや、おさうせ、

てるかた、のだて、

(五一) うらおそいふし

(以下八十九ノそなぐすくおもしろ双紙ニ同シ)

一 きこゑ、そなぐまぐ、

いちやぢや、もちろ、かちゑ、

きみが、けおの、うちろかよ、ある

又 ごとよむ、そなぐまぐ

(五二) ^{十九}うらおそいおもしろのふし

一 きこゑ、そなぐまぐ、

さをかさと、てづて、

きみが、金、うるろかよ、ある

又 ごとよむ、そなぐまぐ

(五三) うらおそいふし

一 きこゑ、そなぐまぐ、

(一)母が
(二)父が

十九の四一

校訂おもしろさうし

あが、^(一)なさま、^(二)よせたれ、
だよ、さうせて、

ふため、まさり、よむちへ
又ごよむ、えなぐまぐ

(五四) うらおそいふし

きこゑ、えなぐまぐ

あおり、つみ、たて、

あが、なさま、

ままの、ぬし、よせたれ

又ごよむ、えなぐまぐ

(五五) うらおそいふし

一きこゑ、えなぐまぐ、

あおりかき、たて、

十九の四三

かぐらの、けおの、うちろかよ、ある
又ごよむ、えなぐまぐ

(五六) うらおそいふし

一きこゑ、さまかさが、

ごよむ、さまかさが、

あやむし、よせる、

えなぐまぐ

又きこゑ、えなぐまぐ

ごよむ、えなぐまぐ

(五七) うらおそいふし

一きこゑ、えなぐまぐ、

つみ、おむもりや、

くよ、ごよみ

十九の四四

校訂おもしろさうし

又とよむ、となくまぐ

(五八) うらおそいふし

一きこゑ、となくまぐ、

とよむ、となくまぐ、

つゞみの、あんじ、國、とよみ

又たまとりよ、あつる、

こら、こし、なおちゑ

(五九) うらおそいふし

一きこゑ、となくまぐ、

もくくら、ひき、つれる、

つくし、げらへ

又とよむ、となくまぐ

(六〇) うらおそいふし

一となくまぐ、たななしむ、

かくく、あんじよ、おもむれ、

又まもの、よの、ぬしむ、

ま人きやが、まよむれ

(六一) 中城おもしろのふし

一おきなむ、となくまぐ、

ちやらの、けよや、へらい、ぼしや

又おきなむ、となくまぐ

(六二)

一たまとりよ、あつる、

うるむし、とな、おちゑ、

うら、とよむ、まちらす、つけれ

又せるましま、あつる

(一) 苦世
(二) 能キ世

校訂おもしろさうし

(六三) たつなふし

一となくをく、おむる、
みかなしの、てだ、
(二) せ、十九
より、よう、あま、よ、なす、てだ
又國のねよ、おむる

くめは二間切おもしろ御さうし

天啓三年 癸亥 三月七日

(一)モ、祖父

(一) あらかきのもりのふじ

一 あまみや、みるや、よや、

まきよ、ゑらでま、おれたれ、

もゝまへ、てづふれ

又 志ねりや、みるや、よや、

ふた、ゑらでま、

又 あらかきの、みやよ、

まきよ、ゑらでま

又 おきおふちがみやよ、

(二) あま(みや)みるやよがふじ

一 あらかきのもりよ

なよしのま、てきて、

おもやけ、めづらがて

校訂おもしろさう。

又おきおふぢが、もりよ

又なよる、ともがなし、

よてこう、物えられ、

又いちの、おもやけや、

たちより ゐより、まちより

(三) あま(みや)みるやまふじ

一きみや、およの、きみ

めつけ、まよむちへ、

かなしやま、みよむめ

又さしふ、いつゝ人、

又あまの、かなしやま

(四) あま(みや)みるやまふじ

一よらせきみ、むかいきよ、

(二)モ、若人

むかいきよ、きみ、ふくり、

ふこりよせ、ありよれ

又おもいきみ、むかいきよ、

又かなふくの、むかいきよ

又ぐしかむの、むかいきよ

(五) あまみやみるやまふじ

一よらせきみの、

みい、きよらや、むかいきよ、

むかいきよが、みぶしや

又かなふくの、むかいきよ

又ぐし川の、むかいきよ

(六) うちいでかおまのきみこいふじ

一くめの、よゝまきみ、

去のこて、とよま

又あんじおそいが、みおまへ

又たゝみきよが、み御まへ

(七) うちいでおまのきみこいふじ

一きこゑ、せだかこが、

よがけ、よせさ

又とよむ、せたかこが

又きこゑあんにおそいや

又とよむあちおそいや

(八) あらかきのもりのふじ

一あまみや、みるやまや、

よさけ、もゝくど、

又きみが、まぶり、せよな

*廿一の七六
ニハとかト
アリ

おぶつゑ、たまれて

又玄ねりや、みるやまや、

ぬしが、まぶり、せよな

(九) きこゑあおりやへふじ

一きこゑ、せのきみや、

とよむ、せのきみや、

拾^{*}えさめ、みおやせ

又きこゑ、あんにおそいや、

とよむ、あんにおそいや、

又うの時の、てだの、

あがて、てりよるやま

又こがねの、みしやぐ、

まだまの、みしやぐ

又ぬき、あげれ、みしやぐ、

校訂おもしろさうし

さしあげれ、みしやぐ

(一〇) うちいでいつかなつたゝまゆふし

一せのきみぎや、いやけ、

たむき、せんきみまゆ、

もゝご、いやけ、むめ

又せだかこよ、いやけ

又あんじおそい、よ、いやけ

又ゑくかよせや、いやけ

又おとくよせや、いやけ

(一一) きこへせのきみがつゝごりかどちへふし

一きこゑ、せのきみが、

おもいの、おぎも、どちへ、みおやせ

又どよむ、せのきみや

(一)モ、東風

(二)モ、順風

(三)モ、牧

又まこち、かた、ふけと

又おゑち、かた、ふけと

又あらかきの、まきよ

又十いろ、まき、よらちへ

(一二) おもろねやがりかふし

一きこゑ、せのきみや、

かみ、ほとけ、

(一三) いみやの、あんじおそい、まぶら

又どよむ、せのきみや

又まゝけまが、みうちよ

又かむるめが、きみぎや

(一三) よるけものろのふし

一きこゑ、せのきみぎや、

ごよむ、せのきみぎや、

いつも、あんじおそいま、ちよべれ

又きこゑ、あんじおそいや、

ごよむ、あんじおそいや

(一四) うちいでかおまのきみこいしふし

一きこゑ、せのきみや、

いのり、やり、ちよべと、

せのきみまよ、よとよせめ

又ごよむ、せのきみぎや

又きこゑあんじおそいや

又ごよむあんじおそいや

(一五) きこゑぐしかむまけろなまふし

一きこゑ、せのきみが、

(一)モ、のろ
大神

(二)モ、父

あかん、ま物、みちやは、
まほよ、そろゑて、みおやせ
又ごよむせのきみが

(一六) おもごだけつあさごふし

一くめの、きみそいや

まゑよ、かち、よてこう、

又おご、きみまゑや、

まへよ、かち、よてこう

又こむて、ごて、みらよ、

まゑよ、かち、よてこう

又まゑ、ゑりぎや、ほしやま、

やへま、まゑ、おむちやれ

又くよ、ゑりぎや、ほしやま、

校訂おもしろさうし

きちやら、たけ、おむちやれ

又なかり、あやみやよ、

ゑん、げらゑ、あまゑる

又うきおほぢが、おむちや、

ゑん、げらへ、あらまし

又(三)くむさうせや、ちよむ、

(四)みちゑ、いぢゑ、いき、のを、まし

又くたる、つちや、ちよむ、

みちへ、いぢゑ、あよ、のを、まし

(一七) くめのきみまいまへまかちよてこうがふし

一 おもごだけ、つかさご、

くめの、まま、おむちへ、

世なおしが、おむちゑ

又きちやらたけ、つかさご、

(三)モ、井之
事

(四)モ、見て

(五)モ、行

(六)モ、肝

十一の三

(一)モ、父事

(二)モ、八重
山島の異名

(三)モ、八重
山島の異名

(三)なさが、まゑ、おむちゑ

又まよりもり、あぢおそい、

ともゝをへ、

あぢおそいを、ちよむれ

又まだま、もり、あぢおそい、

ともゝをゑ

又やゑま、まま、ぎやめむ、

またら、まま、ぎやめむ、

ともゝをゑ

又(三)いよやくよ、ぎやめむ、

まてるま、ぎやめむ、

ともゝをゑ

又なむ、むたぢゑ、

いど、むたぢゑ、

ともゝをへ

(一)モ、清ら
庭の事

(一八) くめのきみとゑがふじ

一 おぼつ、おて、みれと、
 さりよこ、まぢへ、みれと、
 (三) あやみやの、めづらしや
 又 なかち、あやみやよ、
 ゑん、げらへ、あどる
 又 なかち、くせみやよ、
 むか、げらへ、ありる
 又 まとよたが、つかいまよ、
 くめの、まま、おぢちやれ
 又 あが、ころが、つかいまよ、
 なさが、まま、おぢちやれ
 又 うきおほちが、世、やてや、
 もゝかめむ、まへまし、

(二)モ、目と
目と見合る

(三)モ、向顔
之事

十一の五

(一)モ、目が
(二)モ、父

(一九) うちいちへわくめの太おそいがふじ

一 あらかきの、
 うきおほち、がもりよ、
 (三) あが、なさま、
 ふため、まさり、よけれ
 又 大ざこの、とよみもり、
 おれぢちへ、あが、なさま、
 又 大ざこの、ねたてもり、
 おれぢちへ、あがなさま
 又 あらかきの、いなみね、

校訂おもしろさうし

おれ^(三)ちへ、あがなさま

又^(三)十いろ、あしやげ、

八いろ、あしやげ、

こので、あが、なさま

又百かめと、八十かめと、

まへて、あが、なさま

又おもいきみ、げらへきみ、

てづて、あが、なさま

(二〇) きこゑ大きみがさやとだけおれ^(三)ちへがふじ

一きこゑ大きみが、

おしやたる、世^(三)いくさ、

あぢおそい^(三)えよ、世そゑれ

又^(三)ごよむ、せたかこが、

おしやたる、せい^(三)くさ

又あこれ、かなしきみ^(三)えゑ、

えまうち、えて^(三)ま、もどりよれ

又あこれ、かなし、きみ^(三)えゑ、

國うち、えて^(三)ま、もどりよれ

又^(三)もりやゑ、こ、た、ぢや國、えて

えまうち、えて^(三)ま、もどりよれ

又大ころた、ぢや國、えて、

くようち、えて^(三)ま、もどりよれ

又^(三)ゑそこ、かた、ころたよ、

えまうち、えて^(三)ま、もどりよれ

又みおうね、かた、ころたよ、

あおて^(三)ま、もどりよれ

又おぼつ、ぎやめ、ごよで、

あおて^(三)ま、もどりよれ

校訂おもしろさうじ

(二二) うちいちへもあまみやみるやまがふじ

一よなと、むりかねや

もつの、むりかねや

又くよの、うきよ、ぐもと、

國の、たゝみ、きよと

(二三) うちいちへむくめのきみとゑがふじ

一なかり、あやみやよ、

あやぎやね、

おし、あい、まよむれ

又なかり、くせみやよ、

あやきやね

(二四) うちいちへむさとちきようがふじ

一あまみや、きみとゑや、

けおの、きみとゑや、

もゝと、てづられゝ

又ぐしかの、つかい、

かなふくの、つかい

又いちやぢや、ぐち、おいみき、

かなぢや、ぐち、おいみき

又まごよたと、まぢやけて、

あがころと、まぢやけて

(二四) あらかきのもりまうちあがるたゝみがふじ

一あらかきの、もりよ、

うちあがる、ひやし

又あが、なさが、もりよ

又けよのよかるひよ

校訂おもしろさうし

又けおのきや／＼るひよ

又あぢおそいが、み御まへ

又せだかこが、み御まへ

(二五) うらそいのおやのろがふじ

一かねぐすく、大や、

おもしろる、大や、

世そう、ひやし、

うちちゑ、みおやせ

又くよの、ねの、大や、

おもしろる、大や

又けよの、よかるひよ、

おもしろる、大や

又けよの、きや／＼るひよ、

おもしろる、大や

又あぢおそいが、み御まへ、

おもしろる、大や、

又せたかこが、み御まへ、

おもしろる、大や

(二六) うらそいのおやのろがふじ

一かねぐすく、

ねたて、もりぐすく、

世まさる、まま、うちひやし、

みおやせ

又くよの、ねの、

ねたて、もりぐすく、

世まさる

又けよの、よかるひよ、

ねたて、もりぐすく

校訂おもしろさうし

又けよの、きやくくるひよ、

ねたて、もりぐまぐ

又あちおそいが、み御まへ、

ねたて、もりぐまぐ

十一の四二

(二七)

一ふくじ、ぎまのまゆ、

てだよ、みちやる、まさり

又よかる、ぎまのまよ、

又かさま、むか、てだよ

(二)人名

十一の一五

(二八)

いやゝ、ごよたまよ、まくし、ごよたまよ、うら
きらしや、みぼしが、ふじ

一いやや、ごよたまよ、

まくし、ごよたまよ、

九二八

九二九

おやより、こので、

又かさま、むかてだよ、

ま物、むかてだよ

又うまの、としきよ物、

うまれ、としきよ物

十一の十六

(二九)

いやゝ、ごよたまよ、まくし、ごよたまよ、おや
より、このでがふじ

一いやや、ごよたまよ、世、

まくし、ごよたまよ、世、

うら、きらしや、みぼしや

又ななれ、おるあんと、

ごむけ、おるあんハ

又かむえんた、おりやり

(二)モ、人名

校訂おもしろさうじ

(三〇) うちいちへり、なこの、こてるじがふじ

一 なかち、まころくが、

ごよみよる、つかい

まころくが、げらへ

又 ごくよせが、またま、

ごよみよる、つかい

又 こしあて、そりや、つくて、

ごよみよる、つかい

(三一) おもろなよくらがふじ

一 おと、きみまさり、

なさが、おもいきみ、

るじまれ、たな、

なさいきよが、

(一)モ、顔之
事

(二)モ、戸

(二) おみかうの、みぼしや

又 たまをまり、

つきあけむちへ、ちよむちへ

又 たま、やりぢよ、

おし、あけむちへ、ちよむちへ

又 たま、まだり、

まき、あけむちへ、ちよむちへ

又 いご、まだり、

おしあけむちへ、ちよむちへ

(三二) きこへぐしかむま、まげち、なまがふじ

一 くめの、さむかさひ、

なさが、おもいきみ、

世そらう、ぐしかむ、

げらるて

九の二五
十一の五〇

(一)モ、神の
事

校訂おもしろさうし

又とよむ、さまかさと、
なさが、おもいきみ

(三三) うちいちへり、こゑじのが、さじふ、このむらが
ふじ

一かさま、ちやらと、

だりゑよ、とよめ、

みれば、みつまむて

又ま物、ちやらと、

だりゑよ、とよめ

又なごの、とまよ、

だりゑよ、とよめ

又なごの、ひちやよ、

だりゑよ、とよめ

又やまご、ぎやめ、

だりゑよ、とよめ

(三四) かさす、むかてだの、御みしやくの、きやけおふ
し

一かさま、むかてだの、

でむん、おぎもよ、まなむ

又ま物、むかてだの

(三五) うちいちへりなこのこてるむがふし

一かさま、むかてだよ、

おみしやく、ぬきあげと

又ま物、むかてだよ

又あおの、とまさきよ

又あおの、いふさきよ

又おと、まぢとよた

校訂おもしろさうし
又せざの、おやくもい

(三六) あおりやへがふじ

一きこゑ、くよおそいが、
國でもち、げらゑて、
かほう、せち、まる、
あぢおそいよ、
みおやせと、
まぶりよとと、
もゝまへ、ちよとれ

(三七) おもろねあがりままうつながふじ

一かでかむの、どのく、
よしの、かね丸い、
のちをゑの、およい、

十一の六三

(一)モ、西風
(北風ノコ
トナリ)

おぎやかもいと、ちよとれ
又けお、ふきよる、まよしや、
よしの、かね丸い、
のちをゑの、およ^{アハ}と
又なま、ふきよる、まよしや、
よしの、かね丸い、
のちをゑの、およい

(三八) あおりやへがふじ

一かでかむの、どのく、
まつとみま、あちとやせ
又あさどれがまよれと
又^(三)ようどれがまよれと

(三九) あおりやへがふじ

十一の六四

(一)モ、朝風
の閑を云こ
(二)モ、夕風
の閑を云こ

十一の一
廿一の九二

一 忍んこ、ごよたしゆ、

もゝあんじ、やらせや、ちよむ、忍やれ、

ごよむ、あちおそい

又よかる、ごよたし、

もゝあぢやらせや、ちよむ

又きこ忍、あちおそい、

もゝあぢやらせや、ちよむ

又ごよむ、あちおそい、

もゝあぢ、やらせや、ちよむ

(四〇) 忍んこごよたきよもゝあぢやらせやちよもがふし

一 忍んこ、ごよたしよ、

よかる、ごよたしよ、

おもい、きみ、げらへ、

又さうさしや、

あくよ、いけくし

(四一) うちいちへわかねぐまくのろがふし

一 (二) 忍しのが、くよ、いけくし、

もりぐま、おれぼしや

又まちらまが、國、いけくし

又よなむるの、くよ、いけくし

又ごゝろきの、くよ、いけくし

又五たけの、くよ、いけくし

又七たけの、くよ、いけくし

又あちおそいよ、みおやせ

又おぼろ、うちよ、ありよる、

なむぢや、うちよ、ありよる、

かみぎや、いのち、

あちおそいよ、みおやせ

校訂おもしろさうじ

(四二) あおりやへがふじ

一さまかさ、くよ、なおちへ、
かなふくよ、おれむちへ、
なざいきよよ、

みやかの、もり、みおやせ
又きみの、あちの、

國、なおちへ

又ぐしかの、もりよ
又かなふくの、もりよ

(四三)

一きこゑ、せのきみが、
さいの、となの、
まやいと、みもん

又とよむ、せのきみが、
又やまと、ゑむせど
又せだかこが、まへよ
又げらへこが、まへよ

(四四) おまのきみゑゑやなさいきよよまなてがふじ

一きこゑ、せのきみが、
あやつちへ、ごよま
又とよむ、せのきみぎや
又ゑより、もりぐまぐ
又まだま、もりぐまぐ

(四五)

一よたましぎや、おもろ、
もゝあんにより、まさりよせ、

校訂おもしろさうし

まへながく、

たまよ、そろへ、さちへ

又よたまよやが、せるむ

又きこゑあんじおそいや

又よむあんじおそいや

もゝあぢより、まさりよ也

又きこゑ、あぢおそいや

もゝあぢより、まさりよ也

又よむ、あぢおそいや

もゝあぢより、まさり、よ也

七の二五
十一の六二

(四六) うちいちへんごかしきのかねつがふし

一きこゑあぢおそいや、

てるかたを、まぶれ、

まぶれよ也、

(一) 御爲

もゝまへ、ちよ也れ

又よむ、あぢおそいや、

てるしのを、まぶれ

又きこゑ、大きみ也、

あぢおそいや、まぶれ

又よむ、大きみ也よ、

たゝみきよ也、まぶれ

又あまみや、きみとゑや、

あぢおそいが、おより

又まねりや、きみとゑや

たゝみきよが、おより

又おぼろ、せぢ、おろちへ、

あぢおそい也、まぶれ

又かぐら、せぢ、おろちへ、

たゝみきよ也、まぶれ

校訂おもしろさうし
又かぐら、あつる、金をへ、
あんじおそいよ、みおやせと、
まぶり、よと

(四七)

一世のきみぎや、いやけ、
たむき、せのきみまよ、
もゝと、いやけ、
又きみたかゝ、いやけ、
たむき、せのきみまよ
又せだかこよ、いやけ、
たむき、せのきみまよ
又あちおそよ、いやけ、
たむき、せのきみまよ
又るくが、よせや、いやけ、

たむき、せのきみまよ
又おどく、よせや、いやけ、
たむき、せのきみまよ

(四八) きこゑせのきみがつゝこりかぢちへおふじ

一きこゑ、せのきみが、
おもいの、おぎも、
とうちゑ、みおやせ
又とよむ、せのきみや、
おもいの、おぎも
又まこち、かせ、ふけと、
おもいの、おぎも
又おいちゑ、かせ、ふけと、
おもいの、おぎも
又あらさきの、まきよ、

(二)モ、牧こ

(一)モ、順風

校訂おもしろさうじ

おもいの、おぎも、

いみやど、世世、まさる

又ごよむ、あちおそいや、

いみやど、世世、まさる

(四九) あおりやへがふじ

一よたましたが、おもしろ、

も、あちより、まさり、

世世、まゑながく、

たま、よ、そろへ見ちへ

又よたまよやが、せるむ

又きこへ、あんじおそいや

又ごよむあんじおそいや

(五〇)

(二)モ、八重
山おもとた
けの神のこ
とん

一おもとだけ、つかさご、

くめの、まま、お見ちへ、

よ、なおしぎや、お見ちへ

又きちやら、たけ、つかさご、

なさが、まへ、お見ちへ

又おきおほぢぎや、お見よや、

ゑん、げらゑ、あまろ

又なかし、くせみやよ、

むか、げらゑ、あまろ

又まごゆたが、つかい、まよ、

くめの、まま、お見ちやれ

又あがころが、つかいまよ、

なさが、まへ、お見ちやれ

又おきおほぢが、よ、やて、

又たなきよらと、おしうけて

(二)モ、ふれ

校訂おもしろさうじ

又ふなこ、ゑらで、のせて
又てかち、ゑらで、のせて
又月の、カかきよらが
又てだの、カかきよらが

(五一) くめのこいしのがごりかごりかふじ

一くめの、こいしのみ、こがせ
又もゝうら、こいしのみ、こがせ
又あさどれが、カよれと
又世うどれが、カよれと
又カいちやきよらと、おしうけて
又カたなきよらと、おしうけて
又ふなこゑらで、のせて
又カてかちゑらで、のせて
又おきちへ、たてぬい、そゑて

(一) 舟の異名
(二) 舟の異名

(三) かふ之事
之(か子即
チ舟子ノコ
ト)

又ひせちへ、たてぬい、そゑて

(五二) くめのこいしのがごりかごりかふじ

一くめのこいしのが、やれけ
又もゝうら、こいしのが
又あさどれが、カよれと
又ようどれが、カよれと
又カいちやきよらと、おしうけて
又たなきよらと、おしうけて
又ふなこ、ゑらで、のせて
又てかち、ゑらで、のせて
又カこのごう、まうカししの
又大ど、まうカかくの
又カしや、物、カゑると
又かくの、物、カゑると

(一) モ、洋中
の事

又ちやかねもい、ほこて
 又巴かきよらよ、ほこて
 又玄よりもり、むかて
 又まだまもり、むかて
 又そで、たれて、まうて

(五三)

一あけの、こしらいや、
 なだか、こしらいや、
 てとかり、やり、
 せめつけて、ごよま
 又いちもりが、さきよ
 あいもりが、さきよ
 又かな、かふご、きやり
 又かな、よろい、きやり

又うしあや、たて、ごりやり、
 ぬり、てほこ、ごりやり
 又いちやぢや、せめつけて、
 かなぢや、せめ、つけて

(五四) くめのこいしのかくまぢやがふじ

一くめの、こいしのが、
 ふなやれ、ひやし
 又も、うら、こいしのが、
 又あさどれが、玄よれと
 又ようどれが、玄よれと
 又いちや、きよらと、おしうけて
 かいぎや、のぼて、やれ、このへ

(五五) うちいちへぬもごふみあがりぢふじ

(一)モ、寒水

十一の八四

一 おぎやか、まちよく、もい、
おこのみの、たかさ、ぐしか
^(二)くさうせ、げらゑて

又 たみ、まちよくもい、
おこのみの、たかさ、ぐしか
又 きこゑ、あちおそいぎや、
おこのみの、たかさ、ぐしか
又 ごよむ、あちおそいぎや、
おこのみの、たかさ、ぐしか

(五六) ゑんこごよたえよあちおそいてだごりかてだがふ
じ

(一)モ、御貫
之事

一 ゑんこ、ごよたえよ、
あちおそい、てだの、
このみ、よむる、かまへ、つむ、

せんよせ、げらへ
又 世^よかる、ごよたしよ、
あちおそい、てだの、
このみ、よむる
又 いしけなせ、おきて、
あちおそい、てだの、
このみ、よむる
又 おみや、みやつちよ、
おみや、みやさきよ、
あちおそい、てだの、
このみ、よむる

十一の八五

(五七) ゑんこごよたしよおもいきみげらへきみがふじ

一 ゑんこ、ごよたしよ、
よかる、ごよたしよ、

校訂おもしろさうし

あぢおそい、てだご、むかてだ

又きこゑ、あぢおそいや、

ごよむ、あぢおそいや

又ここまの、あぢや、

よこ、くよの、あぢや

又みちゑど、うら、やみよる、

きちへど、うら、やみよる

(五八) およのきみとへやも、うらのごよむがふし

一 およの、きみとゑや、

やほら、ひちへ、まちよら

又おそい、きみといや

(五九)

一 きこゑ、さまかさ、

十一の八六

(一)モ、見て
ど
(二)ア、羨敷
(三)モ、聞と

(二)モ、出帆
の事

十一の四五

おごゝきみ、やれども、

おれるかた

きみとやま、みこゑ

又ごよむ、さまかさご

おれる、かた

又ぐしかの、もりよ、

おごゝきみ、やれども、

おれるかた

又かなふくの、もりよ、

おごゝきみ、やれども、

おれる、かた

(六〇) あおりやへがふし

一 きこゑ、さまかさの、

よそ、せぢ、

あちおそいよ、みおやせ

又ごよむ、さそかさと、

よそう、せち

又ぐしかの、もりよ、

よそう、せち

又かなふくの、もりよ、

よそう、せち

(六一)

一くめの、こいしのが、

もゝをゑ、ごよむ、

きこゑる、もり

又もゝうら、こいしのが、

もゝをゑ、ごよむ

又きこゑ、あちおそいが、

(二)モ、火神

(二)モ、百

(三)モ、八十

もゝをゑ、ごよむ

又ごよむ、あちおそいが、

もゝをゑ、ごよむ

又せ(二)るまゝよ、ゆいつちへ

又せたかこが、み御まへ

又あちおそいが、み御まへ

又も(三)ゝかめえ、をゑて

又や(三)そかめえ、をゑて

又きみつかい、たりる

又ぬしつかい、たりる

(六二) あおりやへがふし

一くめの、こいしのが、

又去より、もりちよる

まだま、もりちよる

校訂おもしろさうじ

又あぢおそいが、おより、

たゝみきよが、おより

又どもゝをゑ、ちよをれ、

やそをゑよ、ちよをれ

又なち、あやみやよ、

みれと、きも、をゑてや、

もゝかめも、をへまし

又あやみやの、大ころ、

あまこ、あぢちへ、もどらよ

又あやみやの、ころゝ、

みか(お)、あぢちへ、もどらよ

(六三) うらおそいおもしろぶふじ

一きころ、大きみぎや、

おしやたる、せい(き)くさ、

(一)モ、清ら
庭と云事

(二)モ、大男

(三)モ男

(一)押寄ル
(二)勢軍

あぢおそいを、世そへれ、

てらちんの、せぢ、おろちへ

又けおの、きみとゑや、

てらちんの、せぢ、おろちへ

又おもかこの、のろゝ、

てらちん、のせぢ、おろちへ

又かぐら、うちよ、ありよる、

こがね、うちよ、ありよる、

かみぎや、いのち、

みさき、さしよをちへ

又かねをか、こひも、をづと、さげて

又かね、みさき、なりをづと、さげて

(六四) あおりやへがふじ

一大きみが、うざしゑよ、

十一の七三

校訂おもしろさうし

おもかその、せぢ、おろちへ、
あぢおそいよ、

まぶらて、おれむちへ

又せだかこが、うざしえよ、

おもかその、せぢ、おろちへ

又てるかそが、うざしえよ、

てらちんの、せぢ、おろちへ

又てるしのが、うざしえよ、

てらちんの、せぢ、おろちへ

又あまみや、きみとゑや、

てるくもひ、いきやある、

さうず、あてか、

くもこ、より、いちゑたる、

まだま、より、いちへたる

又たけが、くまもごよ、

(一)モ、出た
る

(二)モ、峯の
麓の事

もりが、くまもごよ、

(六五) うちいちへへあま(みや)みるやまがふじ

一きみよし、きみの、

きみよ、ほこり、よむちへ

あぢおそいや、

もゝと、世を、ちよむれ

又きみおそい、きみの、

きみよ、ほこり、よむちへ

又きこゑ、あぢおそいが、

きみよ、ほこり、よむちゑ

又とよむ、あぢおそいが、

きみよ、ほこり、よむちへ

又またいらの、あさいよ、

きみよ、ほこり、よむちへ

(二)モ、男人

十一の一九

校訂おもしろさうじ

又おとかねの、まころく、
きみよ、ほこり、よむちへ
又のちよかる、まころく、
きみよ、ほこり、よむちへ

(六六) あおりやへがふじ

一きこゑ、せのきみが、

ましけたま、

つらゑ、まよむちゑ

又ごよむ、せのきみが

又きこゑ、あぢおそいや

又ごよむ、あぢおそいや

又こみかもの、たぢや

(六七) あおりやへがふじ

十一の二〇
十一の八七

一おぎやか、あちとゑや、

でむん、おぎも、とやさ

又たみ、いくさこ

又おもい、世、よせきみ

又おみや、たついつこ

又まみやたつ、いつこ

又けよのよかるひよ

又けよの、きやくるひよ

又あぢおそいが、み御まへ

又たゝみきよが、み御まへ

又もゝかめえ、まゑて

又やそかめえ、まゑて

又あぢおそいよ、とやさよ

又たゝみきよ、世、とやさよ

校訂おもしろさうじ

(六八) きこへせのきみぎやいけくこそろむおれむよ
がふじ

一きこゑ、せのきみや、

むかきみ、げらへて、つかひ

(一)モ、太刀

の事

又とよむ、せのきみや

又あかつ、あやとがね

(二)モ、右同

又あかつ、くせとがね

又たるが、さちへ、よせる

又づれが、さちへ、よせる

又こしらゑる、よせたれ

(三)モ、人名

(四)モ、右同

又かみよしやま、よせたれ

(六九) うちいでとおおむもりぎやけおのきみがふじ

一きみよし、きみの、

九の五
十一の四〇

(一)位衆妻

きみおそい、きみの、

まちら、ためより

又もゝその、やちよく、

なゝその、やちよく

又もゝそ、がなかよ

なゝそ、がなかよ

又くもこ、むより、より

まだま、むより、より

(七〇) やふつよためむがふじ

一ねうしが、ごき、

かみぎや、ごき、

ゑらたる、いちよか、

ころた、あやの、みやし、

うちよ(包)ちへ、かみと、またるな

十一の四一

校訂おもしろさうし

又ごら、うの、とき、

かみぎや、とき

又けよの、ときよさの、

かみぎや、とき

又せだかこが、み御まへ、

ねたて、もりぐまぐ

(七一) おごゝきみまさりがふし

一 おもい、なよくらが、

まゑ、さうだ、ありちゑと、

ゑけ、まさり、きく、うらやみ

又なち、まころくが、

まゑ、さうだ、ありちゑと、

きもたか、もりや

(一)モ、寒水

(二)モ、眞男

(七二) あおりやへがふし

一 くめの、こゑしのが、

世の、いきつきの、

世の、てもち、みおやせ

又もゝうら、こゑしのが、

世の、いきつきの、

又おとまよ、かじ、おれむちへ

世の、いきつきの、

又むくさうだ、おれむちへ

よの、いきつきの

(七三) あおりやへがふし

一 くめの、こゑしのが、

まいと、おとし、

校訂おもしろさうじ

けさつり、ごよで、

又も、うら、こゑしのが

又くめの、あぢおそいや

又ごよむ、あぢおそいや

(七四) あおりやへがふじ

一くめの、こゑしのが、

きも、たか、もりや、

くよ、まさり、まよむちへ

又も、うら、こゑしのが、

きもたか、もりや

又くめの、なかがせく

きもたか、もりや

又ごよむ、中ぐせく

又十いろ、まき、よらちや

(二)ア、心高
きを云なり

おもいの、おぎも

(七五) おもろねやがりままたづながふじ

一きこゑ、せのきみが、

かみ、ほどけ、いみやの、

あぢおそい、まぶら

又ごよむ、せのきみが、

かみ、ほどけ、いみやの、

おぼつ、ゑたまれて

又まねりや、みるやまや、

世、みき、もらくご、

ぬしが、まぶら、せよな

(七六) うちいちへきこゑあおりやへがぢ天のせちおろち
へがふじ

一きこゑ、せんきみや、

とよむ、せんきみや、

とか、とさめ、みおやせ

又きこゑ、あちおそいや

とよむ、あちおそいや

又うの、とさめ、てだの、

あがて、てりよる、やよ

又こがねの、みしやぐ、

まだまの、みしやぐ

又ぬきあげれ、みしやぐ

さしあげれ、みしあぐ

(七七) のちあがりかふし

一せのきみが、きみよしが、

よがふう、なさいきよ

又あが、なさいきよ、てだ

又あまみ、たまちな、おるじし

又いと、ぬきやり、なむ、ぬきやり

又おてづから、みてづから

又とりよむ、やり、うちへよむ、やり

(七八) あおりやへがふし

一ままぢりよ、あつる、

つしやこの、まかね、

つしやこ、まかね、たまよ、

そろゑて、みおやせ

又きこゑ、あちおそいが、

つまやこの、まかね

又とよむ、あちおそいが、

つしやこの、まかね

(一)モ、御手
自

(二)モ、右同
十一の七八
十二の七八
十三の七八
十四の七八

(七九) うちいちへぬくめの太おそいがふじ

一あまみや、そよめきや、

みかなし、^(三) 巴かいきよ、

もゝをゑ、ちよ巴れ

又玄ねりや、そよめきや

玄なて、とよま

又おそい、きみとゑや、

なさいきよよ

又おとかねの、まころ、

なさいきよよ

又のちよかる、まころ

なさいきよよ

(八〇) やほらひちへまちよらがふじ

一およの、きみとゑや、

もゝうらの、とよみ

又おそい、きみとゑや、

又ぐしか巴、お巴る

又かなふく、お巴る

又なさの、うきよくもが

又おきな巴、とよむ

又大くよ、とよむ

又こがねの、みしやぐ

又まだまの、みしやぐ

又ぬきあげれ、みしやぐ

又さしあげれ、みしあぐ

(八一) うちいちへぬをゑのちまやうる巴しがふじ

一ぐしか巴の、もりよ

校訂おもしろさう

いなよね、より、みちへれ

又かなふくの、もりよ

又せもち、おや、たさる

又世かきよもいが、たさる

又あぢおそいが、たさる

十一の三三

(八三) うちいちへのかねぐまくおもいぐせのふじ

一かねぐまく、もりよ

つくせ、よせれ

又きこゑ、あぢおそいや

又なさが、げらゑ、みやよ

(八三) おもろねやがりかふじ

一かねぐまく、もりよ、

もゝうら、まちらま

十一の三四

たち、よむちへ、

ふさよむれ

又ねたて、かなもりよ、

もゝうら、まちらま

又なさが、げらへ、みやよ、

もゝうら、まちらま

十一の三五

(八四) おもろねやがりやまゑのちまやうるむしがふじ

一あらかきよ、おむる、ま物、

世の、ぬしの、ま物

又よさの、くむせ、なし、よむちゑ

又つもの、くむせ、なしよむちへ

又どもゝその、いくさ、

やもゝその、いくさ

(一)モ、千人
(二)モ、八百
人

(一)モ、名人

校訂おもしろさうし

(八五) あおりやへがふし

一くめの、^(一)こゑしのが、
もゝうら、こゑしのが、
せこい、きゝぼしや、
くよとよみ

(二)モ、有ル

又あやみねよ、^(二)あつる、

(三)モ、祖父

^(三)うきおほちが、うゑけ

又あやみねよ、あつる、

(四)モ、祖父

^(四)うきとむがうゑけ

又うねよ、おて、うてと、

ア、祖母

大ざとよ、とよで

又大ざとよ、うてと、

大くよに、とよで

(一)モ、人名

(八六) あおりやへがふし

一^(一)だうのしが、つかい、

きこゑ、あちおそいや、

もゝと、世を、ちよむれ

又だうの大やが、つかい、

きこゑ、あちおそいや

又だうかむよ、よど、まよむ、

きこゑ、あちおそいや、

又^(三)むくさうせ、よど、まよむ、

きこゑ、あちおそいや

(八七) およのきみとゑやちよくいよやまやがふし

一くめの、世、よせきみ、

いけく、まく、まやせ

(二)モ、寒水

(二)モ、打
り遊び事

(二)モ、舟

校訂おもしろさう

(八八) あおりやへがふじ

一大くよ、ごよむ、かねぐまぐ、
せのきみ、てづて、あまやかせ
又おきな也、ごよむ、かねぐまぐ
又あさどれが、まよれと
ようどれが、まよれと
又いぢや、きよらと、おしうけて

(八九) あおりやへがふじ

一きこゑ、せのきみが、
おれて、ふれまへと、
まゑ、ながく、
せ、そろゑて、ちよとれ
又ごよむ、せのきみが、

(一)モ、妙ニ
響ル

(二)モ、男

(九〇) おもごだけつかさこがふじ

一あから、ごもかいや、
み物、ごもかいや、
よ、なおしが、おれむちへ
又くめの、まま、おむちへ、
かねの、まま、おむちへ
又あやみやの、ころた、

校訂おもしろさうじ

たちより、あより、まちより、

(九一) うちいちへいあまみやみるやまがふじ

一あらかきの、もりよ、

たりるこの、みるやよ、つかい

又うきおほぢか、もり、たりるこの

又おみや、げらへ、むちゑ、たりるこの

又まみや、げらへむちへ、たりるこの

(九二) ゑんことよたしよおも(い)きみげらへきみがふじ

一ゑんこ、^(二)よたえよ、

もゝあぢ、やらそや、ちよも、やれ、

とよむ、あぢおそい

又世かる、とよたえよ、

もゝあぢ、よせて、ちよむれ

(二)モ、人名

又とよむ、くよおそいが、

くよ、てもち、げらへて

又ぐしかむの、もりよ、

くよ、てもち、げらゑて

又かなふくの、もりよ、

くよ、てもち、げらゑて

(九三) うちいちへいきこゑせのきみがつゝごりかむちへ
がふじ

一國おそい、くよもりが、

あまび、よむえ、

せだかこが、つかい

又かでかその、中もり、

あまび、よむえ

又おきて、やりよえ、

つかい、やりよと

又お見る、てやと、

あよむ、てやと

又なから、くせみやよ、

みれと、きも、とゑて

又おぼつ、おて、みれと、

あやみやの、めづらしや

又かぐら、おて、みれと、

あやみやの、めづらしや

(九四) あらかきのもりまうちあがるひやしがふじ

一あらかきの、もりよ

うちやがる、たゝみ

又うきおほちが、もりよ、

又おみや、げらへ、むちへ

又まみや、げらへ、むちへ
又もゝかめと、とゑて
又やそかめと、とゑて

(九五) 去のくりやゆなれがみがふじ

一みるやよや、

世、なれ、かみやれと、

けむい、つゑけ

又みるやよや、世つき

又なかくとく、おもい

又(二)きもたかの、おもい

(九六) うちいでまきたたん世のぬしがふじ

一あおりやゑ、きみの、

げらゑ、みもん

(二)モ、心高
き事を云

校訂おもしろさうし

又きみおそい、きのみ、

又だよま、おみ事る

又げよま、おみ事る

又あかぐちやよ、ゆいつちへ、

國、なおちへ、おれちち系、

なさいきよよ

(九七) あおりやへがふじ

一きこ系、あおりやへが、

たけ、みつぎ、

又まの、つぢ、ちよとれ

又とよむ、あおりやへが、

たけ、みつぎ

又くめの、なかぐま、

たけ、みつぎ

又とよむ、なかぐま、

たけ、みつぎ

又けさひ、かみが、たけ、

たけ、みつぎ

又けさひ、のろが、たけ、

たけ、みつぎ

又かみ、むかて、こうて、

たけ、みつぎ

又のろ、むかて、こうて、

たけ、みつぎ

(九八) うらそいおもしろがふじ

一せんきみが、おれたち、

きみよしが、おれたち、

も、ごひやし、うちあがる、

なさいきよ

又あが、なさいきよ、なげくな、

みやかの、もり、みおやせ

又きみの、あちの、國、なおちゑ、

かなふくよ、おれむちへ、

なさいきよよ

又ぐしかむの、もりよ、

くよ、なおちへ、おれむちへ、

なさいきよよ

又かなふくの、もりよ、

せんきみを、煮りよむめ

又てだ、なさいきよ、なげくな、

せんきみを、煮りよむめ

又あちおそいが、せいやり、よむと

せんきみぎや、けやりよむ

(九九) うちいぢへんのちあがりかふじ

一せんきみが、きみよしが、

世がほう、なさいきよ

又あが、なさいきよ、

てだ、なさいきよ

又あまみたま、ちな、うるむし

又いご、ぬきやり、なむ、ぬきやり

又おてづから、みてづから

又とりよむやり、うちよむやり

(一〇〇) あおりやへがふじ

一ままじりよ、あつる、

つしやこの、まかね、たま、

世、そろへて、みおやせ

校訂おもしろさうじ

又きこゑ、あんじおそい
又とよむ、あんじおそい

(1011)

一きこゑ、せのきみぎや、
ともらそへ、

あんじおそいま、ちよとれ

(ア、ニモ知斯、恐ラクハ續キナラン、前ノ紙一枚餘スベキヲ、直ニ次ノ頁ニカキ又例ニ違ヒ、アトラ又ヨリ次ノ枚ヘカキシナルベシ)

又とよむ、せのきみが
又首里、もり、ぐそく
又まだまもり、ぐそく

(1012) きこへせのきみぎやとかきみけへてつかへがふ

一きこゑ、せのきみが、

いけくど、

そろとと、おれら

又とよむ、せのきみが、

又首里もり、ぐそく

又まだまもり、ぐそく

又^{ア、}まよが、いのち、

くまが、いのち

みおやせ

又いしが、いのち、

かねが、いのち、

みおやせ

又かむら、いのち、

てもち、いのち、

みおやせ

校訂おもしろさうし

(一〇三) あおりやへがふし

一まけかけの、のろの、

ぎまもりよ、おれて、

金を^{こがね}る、

あぢおそいよ、みおやせ

又くよのねの、のろの、

ぎまもりよ、おれて、

金をへ

(一〇四) みるやまがふし

一まのくりやと、

よなれかみ、やれと、

やれ、このる

又まのくりやが、

やまど、たび、のぼて、

やれこのへ

又かみよしやが、

やしろ、たび、のぼて、

やれこのる

又やまど、たび

なお、かいぎや、のぼてか、

やれこのる

又やしろたび、

なお、かいが、のぼてか、

やれこのる

又あおしや、てうだま、

かいが、のぼて、

やれこのる

又ふくしや、てうつしや、

(三)き、すぐ
リ

校訂おもしろさうじ

かみ^{十一}やれを

又みるやまや、

い^三ちへき、かみ、やれと

又みるやまや、

ちやくま、かみ、やれと

又いちろきり、やりかね、

巴かこ、さし、よ巴ちへ

又いちへきり、やりかね、

みる^アなし、巴かいきよ

又中ぐまぐ、ちよ巴る、

みりなし、巴かいきよ

又ままおそいよ、ちよ巴る、

みりなし、巴かいきよ

又あちおそいが、おもいぐ巴、

みりなし、巴かいきよ

十一の八〇
廿二の四六

(一〇五) たまぐまぐもりぐまぐがふじ

一こいしのが、さしふ、どのをらよ、

ままでん、くよでん、みおやせ

又こいしのが、むつき、どのをらよ、

ままでん、くよでん、みおやせ

又まらげおゑて、きよらげ、おゑて、から、

ままでん、くよでん、みおやせ

あんじ、おそいま、かけ巴れ

(一〇六) くめのきみまゑがふじ

一おぼつ、おて、みれと、

さりよこ、まちへ、みれと、

あやみやの、めづらしや

又なから、あやみやよ

十一の四
廿二の一一
廿二の二〇六

(一〇七) うらそいおやのろがふじ

一 ほのこらが、もちよろ、

けよの、うちの、

おや、ひやし、みおやせ

又 かみよしやが、もちよろ

又 かなや、さきとちへ、いちへ

又 みるや、さきとちへ、いちへ

又 かがね、よまか、まよむちへ

又 なむぢや、くため、まよむちへ

(一〇八) うらそいのおやのろがふじ

一 あかなさの、いきやが、

いよる、めづらし、

かぐら、おて、ており、

あまび、まよらい

又 より、きよらご、

又 より、みちゑご、このみよる

又 あが、なさが、

ゑか、さうせら、ぎやめや

又 あが、なさが、

ごきごり、よら、ぎやめや

(一〇九) あおりやへがふじ

一 まころこが、もちなし、

よりあけ、もり、おれむちへ、

でむん、むん、かぐら、ぎやめ、ごよま

又 なよくらい、まつなりと、もちなちへ

又 なさか、せん、おやか、せのこのみ

又 もゝかめと、やそかめと、まへて

校訂おもしろさうし

又あおの、てよの、たま、まだり、まき、あげて
又けおの、うちの、いと、まだり、まき、ほげて
又なよくらが、うざしえよ、
よらふさい、おろちやれ

(一一〇)

一くめの、こゑしのが、
ゑ、け、みのかま、
うちちゑ、とよみ
又も、うら、こゑしのが、
ゑ、け、みのかま
又けよの、よかるひよ
ゑ、け、みのかま
又けよの、きやくゝるひよ、
ゑ、け、みのかま

(一)モ。清ら

(一一一) あおりやへがふし

一くめの、こゑしのが、
世、よせ、あかま、おどん
又も、うら、こゑしのが
又きこゑ、あちおそいが
又とよむ、あちおそいが

(一一二) あおりやへがふし

一くめの、こゑしのが、
も、うら、こゑしのが、
せい、たかさ、
とよみ、よむる、たゝみ
又きこゑ、あちおそいが
とよむ、あちおそいが

校訂おもしろさうし

又ぐしかの、もりよ、
かなふくの、もりよ

(一一三) うらそいおもろのふし

一せたかこと、

だよま、御み事ろ、

こゑのま、

もちよろゑて、みおやせ

又あぢ、おそいや

だよま、御み事ろ

又あかぐちやが、てるちろ

又せるまゝが、てるちろ

又さしふい、おもろい、せらま

又むつきと、^(三)せるむと、えらま

(一)モ、さし
ふん
(二)モ、おも
ろこ

(一一四) あおりやへおふし

一ぐしかの、またまうちと、げらへて、

よく、げらへて、まさりよる、せたかこ

又かなふくの、またま、うちと、げらへて

又たうの、ふねせよ、こがね、

もちよせる、ぐすく、よくげらへて

みおやたいりおもろ御さうし

第廿二

稻之穂祭之時おもろ

(一) あおりやへがふし

一 あまみきよがうざし去よ、

この、大まま、おれたれ、

ごもゝをへ、

おぎやかもいと、ちよとれ

又 ほうをな、とて、

ぬきあげと、

ちり、さびと、つけ、るな

(二) おしかけふし

一 きこゑ、大ぎみぎや、

けおの、うちの、のろく、

校訂おもしろさうし

あよそろて、

かぐら、ひやし、みおやせ

又とよむ、せた、かこが、

もちろうちの、のろく

(三) うらおそいおもろのふし

一せん、きみが、おれたち

きみ、よしが、おれたち、

もゝと、ひやし、

うちあがる、なさい、きよ

又あが、なさいきよ、なげくな、

せんきみまよ、まよりめ

(四) くまおそいきみのふし

一よき、げらへ、よきの、めづらしや、

世がほう、まがほう、みおやせ
又きみ、げらへ、きみの、めづらしや

(五) おちいでいごかをおもろのふし

一きみ、がなし、なつ、たてと、

系のちかみ、このみ、まよわちへ、

又とが、大ざと、なつたてと

(六) うちいでかいつかなつたゝまよがふし

一あおりやへと、さすかさと、

よそう、せぢ、もつ、たゝみ

又たゝみ、きよと、おき、くもと、

(七) なつたてまがふし

一さまかさと、

まゑの、ひやし、

校訂おもしろさうし

めづら、ひやし、

みおやせ、

又きみの、あぢよ、

(八) うらおそいふし

一たまの、みそで、がなし、

げらへ、みそで、がなし、

かみ、まぢや、そるて、

ほこり、よわちへ

又あうのたけ、大ぬし、

なでまもり、大ぬし、

(九) のろあがりのふし

一あまみや、さぢ、またる、

まより、もり、ぐまぐ、

これど、こがね、うち、たどる
又まねり、さぢ、またる、
まだま、もり、ぐまぐ

稲の大祭之時おもしろ

(一〇) かぐらふし

一きこゑ、大きみぎや、

とよむ、せだかこが、

さしふ、おれ、なおちへ

又おぼつゑかどりよむちへ

だしま、きし、なおちへ

(一一) おしかけふし

一きこゑ、大きみぎや、

校訂おもしろさうし

けおの、うちの、もちよろ、
みしまいのて、

あんじおそいよ、みおやせ
又ごよむ、せだかこが、
もちろ、うちのもちよろ、

(一二) おしかけふし

一きこゑ、あおりやへや、

せぢ、まさて、おれむちへ、

世もつ、せぢ、

あぢおそいよ、みおやせ

又ごよむくよ、もりや、

けお、そ^ア理て、おれむちへ

(一三) おちいでとおしかけふし

1001

一きこゑ、さまかさが、
もゝご、ちよむれ
あぢおそい、のちまさり、
もゝあぢ、なおえよむれ
又ごよむ、さまかさが、

(一四) あおりやへがふし

一きこゑ、大きみぎや、

おぼつゑか、ごりよむちへ、

けおの、うちの、おし、あけて、

あぢおそいえよ、

ごもゝむへ、ちよむれ

又ごよむ、せだかこが

(一五) あおりやへがふし

1001

一 亥より、大きみぎや、

ごよむ、くよおそいぎや、

國ふさて、ちよ^レけれ

又 けおの、うちよ、もどて、

もちろ、うちよ、もどて

(一六) てがねまるふし

一 きこゑ、大きみが、

おぼつ、せぢ、おるちへ、

あんじ、おそいよみまぶて、

きみくや、おぼつ、より、かくら

又 ごとよむせだかこが、

かぐら、せぢ、おるちへ

(一七) おしかけふし

一 よるや、ごよむ、大ぬし、

かなや、ごよむ、^レかぬし、

よるや、せぢ、みおやせ

又 だしま、おそう、あぢおそい

だきより、おそう、あぢおそい

(一八) かみしも天ごよみがふし

一 きこゑ、きみ、がなし、

ごよむ、きみ、がなし、

これど、だよの、^レまただやれ

又 きこゑ、あんじおそいや、

ごよむ、あぢおそいや、

又 つくし、ちやら、^レときよ^レちへ、

てがねまる、さし、よ^レちへ

(一九) きみがなしふじ

一 きこゑ、きみ、がなし、
きみが、いのろ、もりよ、ちよわちへ、
ままが、おゑ、ちよけれ
又 ちよむ、きみがなし

(二〇) やまきおもいのふじ

一 もと、ふみあがりや、
けさよりや、まさり
もうちやらのぬしてだ、
なりよむちへ
又 きみの、ふみ、あがりや

(二一) 同ふじ

一 もと、ふみ、あがりや、
みち、あけて、
かなひやぶ、てづて
又 きみの、ふみあがりや

知念久高行幸之御時おもしろ

首里御城御打立之御時

(二二) むかしちじめからのふじ

一 むかし、ちちまりや、
てだこ、大ぬしや、
きよらや、てり、よけれ
又 せのみ、ちちまりや

與那原村稻福親雲上宿ニ而御規式の御時

校訂おしろさうし

(二三) かぐらふじ

一 きこゑ、 大きみぎや、
こよむ、 せだかこが、
さしふ、 おれなおちへ
又 おぼつゑか、 どりよぢちへ
だしま、 きらなおちへ

右同所御打立前に

(二四) 大ざこのげそのおもいあんじぎやふじ

一 よなと、 ばま、
きこゑ、 大きみ、
やちよ、 かけて、
こよまさよ

又 あきりぐち、

こよむ 大きみ
やちよ

佐敷よりやげもりにて

(二五) うらそいのおやのろがふじ

一 さしき、 よりやげのもりよ
まま、 よせる、 つゞみの、 あるあち
ねくよ、 よりやげのもりよ

さやそ御たけにて

(二六) きこゑきみおそいがふじ

一 きこゑ 大きみぎや、

校訂おもしろさうし

さやと、たけおれとちへ、
うらくと、
おさうせやよ、ちよとれ
又ごよむせたかこが、
よりみちへハ、おれとちへ

さやと御棧敷まで

(二七) うちいでハおしかけふし

一 さやとたけ、みちやけ、
ゑよ、ゑ、やれおせ
又そこよや、だけ、みちやけ

御船よ被召候御時

十三の二

(二八)

一 おしちへたる、ゑ、
つかさご、ゑ、
あと、いので、とりよる、ゑ、
又とりいぢへたる、ゑ、

御船帆上ケの御時

(二九) もつましがふし

一 あがるいの、大ぬし、
や、^{ア、ナシ}やの、まほう、おしあげて、はりやせ
又てだが、あなの、大ぬし

久高ごなかまで

第廿二

一五

一四

1011

1011

校訂おもしろさうし

(三〇) ままうちあおりやへがふし

一あがるいの、つかさご、
あがたかべ、つかさご、
うみとらちへ、かせなおちへ、つかい
又てだが、あなの、つかさご

久高外間御ごのに而御規式の御時

(三一) ねいしまいしがふし

一くだかあつめなよ、くせきよらが、
けおのうち、あらしきの、やくめ
又ほかまあつめなよ

知念大川よて御規式の御時

(三二) やゝのきくたけがふし

一きこゑ大きみぎや、
ちねんもり、ぐまく、
かけて、ふさよむちへ、
かぐら、あつる、
かもこいしこつくて、
おぎやかもいよ、
みおやせ
又とよむせたかこが

玉城やぶさつの御いべの御前に而

(三三) うちいぢへかせちよみせいくさがふし

一だしまおしかさが、

とよみよろ、お忍さごもり、みちやる
又だきより、おしかさが

玉城あまつよよて

(三四) かつれんをいきやるかつれんがふし

一あまつ、い、あめたもま、むらね。
あまつ、い、おいつまい、いきやせ
又あまつ、い、くれたもま、むらね

あかつきのおもろ

(三五) おちいでいふ忍のさりのふし

一あがるいの、あけもどろ、たてと、
どはしり、やはしり、おしあけわちへ、

みもん、きよらや

又てだが、あなの、あけもどろ、たてと

(三六) きよみあぐむがふし

一あがるいの、大ぬし

ふ忍の、さりの、がこ忍の、
うらくと、きよきよらや
又てだが、あなの、大ぬし

(三七) ひやくなうらまろがふし

一きこ忍大きみぎや、

おれづむが、たてと、
さやと、まもをしり、
おしあけよ、ちやうのしよ、
たますだれ、

校訂おもしろさうし

まきあげよ、までもの

又よむ、せだかこが、

見かなつが、たてと

御歸城の御時 附路次上下ハ知念佐敷

おもしろ

(三八) あけしのがふし

一かみがなし、かみきよら、あおる

こかせ、やもごる、くもひきやか、

こがねしま、そちへお見ちへ

又のろがなし、のろきよら

雨乞の時おもしろ

(三九)

一やどり、こしらいや、

めまか見の、まさうき、

こゑが、お見ち、

又もりの、こしらいや

又みるやとゝるきや

又かなやとゝるきや

又あちはやま、なりきよら、おるち

又まよはやま、なよま、さゝげて

昔神代ハ百浦添御普請御祝ひの時

(四〇) おくらつがふし

一志よりお見る、てだこが、

も、うらおそい、げらいて、
たまむしり、たまやりと、みもん
又ぐまくおむる、てだこが

(四一) 素よりゑこのふし

一素よりもりぐまく、
ながゑ、きよら、おぐまく、
だりじよ、また、かみ下、とよめ
又まだまもりぐまく

(四二) 同ふし

一素よりおむる、てだこが、
とちやの、さいく、あどゑて、
とねうちする、こといぶさ、まだちへ
又ぐまくおむる、てだこが

唐船すらおるし又御茶飯之時

(四三) あかすめづらしやがふし

一あかすめづらしや、
いちらがた、おみまぶてま、はりやせ
きみの、めづらしや

祝ひの時

(四四) きこへきみがなしみちやるまさりがふし

一きこゑ、きみがなし、
ねいし、まいしの、
あらぎやめ、ちよむれ
又とよむ、きみがなし

も、うらおそい、げらいて、
たまむしり、たまやりと、みもん
又ぐまぐおむる、てだこが

(四一) まよりゑこのふし

一 志よりもりぐまぐ、
ながゑ、きよら、おぐまぐ、
だりじよ、また、かみ下、とよめ
又まだまもりぐまぐ

(四二) 同ふし

一 志よりおむる、てだこが、
とちやの、さいく、あどゑて、
とねうちする、こといぶさ、をだちへ
又ぐまぐおむる、てだこが

唐船すらおるし又御茶飯之時

(四三) あかすめづらしやがふし

一 あかすめづらしや、
いちらがせ、おみまぶてを、はりやせ
きみの、めづらしや

祝ひの時

(四四) きこへきみがなしみちやるまさりがふし

一 きこゑ、きみがなし、
ねいし、まいしの、
あらぎやめ、ちよむれ
又とよむ、きみがなし

(四五) あおりやへがふし

一 おぎもかなしきや、
てだ、かみ、そゐて
まふよけれ
又みかうかなしきや

(四六)

一 こいしのが、さしふ、このむらよ、
ままでん、くまでん、みおやせ
又まらげ、おゑて、きよらげ、おゑてから
ままでん、くまでん、みおやせ

御冠船之御時おもしろ

尙程王様御冠
船之時より此
おもしろに成ル
(原本ニハコ
ノ註四四ノト
コロニアレド
此處ニアルベ
キカ)

十一の八〇
廿一の一〇五

十二の一二

尙程様御冠船
之御時よりお
ぎもかなしき
と云おもしろに
成ル文句上座
ニ有ル

(四七) まよりゑこのふし

一 玄よりおゑるてだこが
おもいぐわの
あそびなよれをのみもん

首里天尙益王加那し乃美世よみおと事をおかみおもしろ御双
紙二部書あらため申壹部之御城よ御格護壹部の言葉間書よ
調おもしろ主取乃かよへかくこおよせめされ候

昔大清康熙四十九年庚寅
七月三日

攝政 越來王子朝奇

三司官 識名親方盛命
幸地親方良象

池城親方安倚

奉行 津嘉山按司朝睦

座間味親雲上景典

主取 津瀬親雲上實昌

立津親雲上全明

伊良皆筑登之親雲上重休

並里筑登之親雲上嗣喜

瑞慶田筑登之親雲上正方

小渡筑登之元敷

嘉敷子宗宣

おもしろ主取

宜野灣間切大山村

安仁屋親雲上

1011R

校正を終へて

校正がやつと済んだ。私は校正中に氣付いた點をざつと述べ、序でにオモロの文法と音韻とを手短に書く必要を感じてゐる。

例言の中にも、「オモロの記載方は、出來得るだけ、原本に従つたが、中には多少訂正したところもある。」といつて置いたが、三校か四校の時、ふと氣が付いて、その配列方を變更したのも一ある。十二の巻いろくのあすびおもしろおさうしの七十八章に、

一ちやむかねやア、チャ

むこゑけりやの

ちやむこはひや

よはひやよ

又だにもこもて

げにもこもて

又たまもたちや事

みしゆもたちやこと

校正を終へて

又たまもちにげて

みしゆもちにげて

又さゝくさもこの

よりてさもころ

といふのがあつて、第一スタンザの意味がさつぱりわからなかつたが、いろ／＼考へた結果、

一ちやむかねやむこ

ゑげりやのちやむこ

はひやよはひやよ

とならべかへたら、判然わかるやうになつた。ちやむかねは人名で、ちやむこはその對語である。ゑげりやはいちゑき又はいじゑけりの同義語で、賢いとか利口とかいふ程の意味をもつてゐるが、現代琉球語では變化してイギリ又はイジリになつてゐる。はひやよはひやよは、ハイヨー／＼に當る古語で、これはしまつたといふ感歎辭である。さうすると、このスタンザの意味は、喜屋武加根は氣のきいた奴だと思つたら、これはしまつた！といふことになる。もうこれだけわかつたら、後の方は樂に讀める。逐語譯をして見ると、正直な婿と思つて、信實な婿と思つて、玉を持たしてやつたら、着物を持たしてやつたら、玉を持逃げして、着物を持逃げして、この毒草みた

いな、浮草みたいな、婿の野郎奴が、といふことになる。さいくさいはさいくさいを入れる時（即ち干潮に海岸の水溜にミンナといふ草を流して魚を捕る時）に用ひる毒草のことで、之を婿の前に附けると、やくざな婿といふ事になる。よりくさは浮草といふことで、之を婿の前に附けると、ヒンジムン（放浪して歩く無頼漢の義）といふことになる。この言葉は今日でも沖縄島の北部の山原地方の方言に遺つてゐる。最後の句のさいくさいむころのは、琉球語ではロとラとは能く混同するから、ここによると、のの誤りかも知れないが、萬葉の子ろ、妹ろ、夫ろのろと比較することも出来る。一般的に人を指すのでは無くて、特定の人を指してゐる點は、兩方とも能く似てゐるが、これには萬葉のろのやうになつかしみがなく、却つてその反對の意味が含まれてゐるやうな氣がする。けれどもこれは私が少し考へ過ぎてゐるのかも知れぬ。それから萬葉に於けるやうに、むこをもこ書いて、おとこが混同してゐるのも、注意すべき點ではないか。

兎に角、おもろの原本にあゝいふ並べ方をしたところから考へて見ると、當時のオモロの校訂者たちには、この盜難を歌つたオモロの意味が、はつきりわかつてゐなかつたやうな氣もする。このオモロのすぐ前に、三スタンザからなる可なり長いオモロがある。テイヌのシノッチャのやうに、「やにやはれ、ゑ、おい、ちよろめへ、ゑい、やうら、やうら、やうら、やうら、やうらへ」といふ掛聲のやうな、はやしのやうな、言葉の連続したオモロであつて、一つのスタンザがぶつた

けに書かれてゐるが、「おもろさうし」では、意味のわからないオモロは大方かういふやうな形式で書かれてゐる。このオモロの第一スタンザも亦この例に漏れない。

私は此頃オモロの言葉間書コトバエリヤガキ(即ち註)や、オモロの校訂者たちによつて編集された『混效驗集』の語釋に、かなり誤りのあるのを發見して、オモロを解釋する場合に、文獻のみをあてにしてゐては間に合はないといふことを痛切に感じてゐる。オモロが五百年間の詩歌である以上、その用語に幾多の變遷があつたことは疑ふ餘地がない。一例を擧げて見ると、尙眞王時代(西曆一四七七年—同一五二七年)のオモロ詩人を謳歌したオモロ(八の一)に、

おもろ、ねやがりぎや

あまへ、わちへ、からは

(オモロチヤガリが歡び給ひし以上は)といふのがあつて、このあまへ、わちへには、歡び給ひての義があり、又同時代に首里城の正門歡會門を造つた時の讚歌(五の六九)に、

おぎやかもいがおこのみ

ちはなれば、そろへて

あまへのちやうはげらへて

(尙眞王の御意により、屬島の民を招集して、歡會門を造營して。)といふのがあつて、このあ

まへのちやうには、歡びの門の義があるが、兎に角このあまへ、といふ動詞には、欣喜雀躍といふほどの意味があつて、尙眞王時代の琉球民族の若々しい氣分が能くあらはれてゐるやうに思はれる。それから一世紀經つて、島津氏の琉球入後、即ちオモロの第二第三の結集が完結した頃に、この言葉の内容がどう變化したかは判然しないが、清の康熙五十年頃、即ちオモロの註や『混效驗集』が出来た頃には、その内容は大ぶ變つてゐたやうである。それは『混效驗集』に、あまへ、わちへ、すばいれを解して、「二つ共歡の心か」としたのでも能くわかる。そして同書に、あまゑおちやうを歡會門としたのを見ると、この頃までは、あまゑおちやうの發音はまだ崩れなかつたのである。けれどもその意義が殆ど忘れられてゐたことは、あの解釋に疑門が附してゐるのでも知れる。その後その發音は、いつの間にか變化して、廢藩置縣當時には、ハーメーウチャウになつてゐた。ハーメーウチャウはやがて「老婆の門」の義で、偶然とはいへ、それが琉球民族のたそがれを象徴するに適當な言葉であるのも不思議ではないか。あまへるの内容は、かうして全然變つて了つたが、その形式だけは崩れずに遺つてゐて、別の内容を盛つてゐる。即ち現代琉球語のアメーユンは、國語のあまゆに稍々近い意味をもつてゐて、その同義語のスイペーユンも、國語のそばゆに稍々近い意味をもつてゐる。

思ふに、オモロは大方當時の生きた言葉で歌はれてゐたのであらう。が稍々後になると、特に

オモロが衰へて来ると、オモロの詩人たちが、日本現代の詩人が古語を復活させて詩を作つてゐるやうに、所謂みせの言葉を復活させて、オモロを作つたといふこともあつたであらう。かうして各人が古語を復活させる場合には、同一の言葉を使つても、その内容に多少の差異があることを知らなければならぬ。これはオモロの研究者が常に念頭に置かなければならないことである。

それからオモロは、音韻の變化や語尾の變化のために、一寸見ても國語と縁故が遠いものゝやうに見えるが、注意して見ると、その語彙の十中八九までは、國語と同語根である。たゞ同じ言葉でも意義に多少の差異はあるとしても、音韻の法則と語法とさへ心得てゐたら、國語の知識の豊富な人に取つては、オモロの研究などはさう艱難でもないやうな氣がする。

チャムバレン氏は、其の琉球語に關する論文 *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* の中に、國語と琉球語との系圖的關係について、

この二國語の語法を精較すると、アフレシテス語詞論に於ても、シクタフキス措辭論に於ても、その委曲末節に於ける著しき差異と共に、根本的一致——イスパニヤ語とイタリヤ語との間に於ける完全な一致——の存在することがわかる。これは單語の場合に於ても亦等しく言ふことが出来よう。もし兩國語共通の祖語があつたとすれば、日本語は正しく其の或部分を、琉球語は其の他の部分、忠

實に保存してゐるのであらう。——しかも近代日本語が古代日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠實であることがわかる。それは動詞の語尾變化コシユケイシヨシに於て著しく現はれてゐる。要するに、二國語の相互的關係を、イスパニヤ語とイタリヤ語とのそれと、否寧ろイスパニヤ語とイタリヤ語とのそれと、比較するのも大過はなからう。

といつてゐる。琉球の政治家羽地王子向象賢も、二百四十年前、その「仕置」の中に、「竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉の餘相違者遠國之上久敷通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば」と書いてゐる。琉球最後の政治家宜灣親方朝保も亦明治の初年「琉語解釋」を著し、その序文中に、向象賢の説に賛同して、「まことにさることなるべし古事記傳萬葉集などを見るに日本上古の言葉爰には今も多く残り」と記してゐる。實に氏がいへる如く、日本本土ではどうに死語となつたもので、今現に南島で使用されてゐるのが多いのは不思議な位である。試みにその中から著しいのを擧げて見ると、ウハナリ・クワナリ(後妻・前妻)、アケツ(蜻蛉)、アカトンキ(曉)、シチャダン(細螺)、マ、キ(細射弓箭)、末々岐由美(末々岐由美)、ツビ(尻又は肛門)、ナイ(地震)、シ、(肉)、イリキ(和名抄に加之良乃安加俗云伊呂古)、ナヘグ(蹇)、ヨム(算む)、マル(屎麻理散)、ナス(産す)、アカル(別る)、アマリ又はアモリ(天降)、フグリ(陰囊)、コトイ(特牛)、サユン(貨布)、ツクラ

(鯨)、カブチ(根根)、和名抄に加布智)、ウゴナアリ(祝詞式、集侍、神主祝部等)、マダ(交接)、ハエ(榮)、イガ(我)、ワ(吾)、ア(吾)、ケニ(源氏、給へるけにこそは)、シブタユン又はシブタイ(源氏、しほたる、あま)、ワラベトハラタチミシヨーチー(源氏、わらわべと腹立ち給へるか)、等の如きものである。これらの中には、オモロや金石文や方言にのみ遺つて、標準語では最早使はれなくなつたものもある。かういふやうに南島には古代日本語が澤山遺つてゐるばかりでなく、こゝでは日本古代の生活様式が窺はれるのである。柳田國男先生は、その劃時代的名著『海南小記』中の「阿遲麻佐の島」の章で、天孫民族が沖繩諸島を經過して北進したことをほめかされ、移川子之藏氏も印度・南支那・南洋・南島・日本の白鳥説話の比較研究から、同様なことをほめかされたから、オモロの所謂ニライ・カナイといふ樂土も遠からず闡明されようとしてゐるが、もうかうなると、チャムパレン氏などの天孫民族南下説は、到底維持することが出来なくなつて來るのである。けれども私は言語學上の見地から、かうして北進した天孫民族が、九州で朝鮮半島を經過してやつて來た比較的文化的程度の高い民族と落合つて、こゝで融合して一種の新文化を形成し、さうして出來た混成民族の一部が、逆に南島に移住して、かつて袂を分つた連中と邂逅したこともあり得ると考へて居るが、これは私の固定觀念が私を不聰明にしてゐる爲では無いかと、心ひそかに悲しんでゐる次第である。兎に角南島語の大部分は、彼等が天孫降臨の途

中で置去りにされた時に、或は移住した時に、もつていつたものだらうが、その後死語となつたものが、平安朝から室町時代にかけて日本々土との交通が頻繁になつた時に、補充されたのもあつたであらう。又中央部ではどうに死語となつて、九州地方の方言の中に生きてゐたのが、輸入されたのもあつたであらう。又今の詩人がよくやるやうに、オモロの詩人たちもハイカラがつて、日本の文語又は方言をオモロ中に取入れたこともあつたであらう。これはオモロを通讀した人のように氣が付いたところである。だからオモロ中の難語で、國語辭典の助けを借りて容易く解ける場合がかなりあることを知らなければならぬ。それから琉球語には日本語で影を隠した祖語の一部が保存されてゐるわけだから、かういふものに出會はしては、國語の辭書はもう役に立たない。かういふものは琉球語自身で解くより外仕方がない。即ち各地方及び各島嶼に遺つてゐる方言が生きた辭書でなければならぬ。試みに二三の例を擧げて見よう。昨年の夏『校訂おもしろし』の原稿を携へて上京した時、柳田先生に、琉球國由來記の中に、「このまきよの雨欲しやにこのくだの水欲しやに」といふ文句があるが、そのまきよとくだは何の意味かと聞かれて、即答することが出来ないで赤面したが、國に歸ると間もなく、縣下の校長會か何かで那覇に出て居られた國頭郡今歸仁校の校長の宮城眞治君に、國頭郡の方言にマキヨといふのがあるかと聞いたら、羽地村にマチユーといふ言葉があつて、境内若しくは氏神の守る範圍といふ程の意味をもつてゐる

るどいふことを教へて下さつた。お蔭で由來記に出てゐる祝詞の意味が能くわかつたと同時に、オモロに出てゐる「まきよ／＼のろ／＼」(二二の一二)、「づれのふた、づれの、まきよ、下れ欲しや、いしけ、まきよ、いしけふた、おれぶしや」(十三の七三)、「まきよのかず」(二十の二二八)、「まきよ、あらです、おれたれ」(二十一の一)の意味まではつきりして來た。それからオモロについみ(鼓)の同義語になりよふどいふ言葉があつて、そのふが清音だか濁音だか永い間疑問であつたが、田島利三郎先生が採集された「各間切のろくもいのおもり」中の國頭郡金武村のオモリに、なりぶどいふ言葉があるのを見て、なりよぶの正しい發音を知ることが出來た。それから琉球語にサダルといふ言葉があるが、これには先になるどいふ意味があつて、沖繩本島はもとより、宮古八重山諸島でも、奄美大島諸島でも、つまり南島全體で、この言葉は盛んに使用されてゐる。そして琉球の標準語では、それがサダラ(將然形)、サダイ(連用形)、サダユン(終止形)、サダユル(連體形)、サダリ(已然形)、サダリ又はサダレー(命令形)といふ風に活用してゐる。私はこの動詞の語根のサダと猿田大神又は猿田彦神のサダとの音韻の類似及びこの神をして古史神話中に有名ならしめた特徴——古事記に所謂「仕奉御前」、書記に所謂「吾先啓行」——から、猿田彦といふ神名それ自身に、「御先導をなしたる神」の義のあることを論じて、一昨々年五月の國學院雜誌で發表したことがある。思ふに西暦七世紀の頃記紀が書かれた頃には、日本人は最早だ

かに先立ち行くどいふ意味のあることを忘れて了ひ、いつしか猿田といふ漢字をあてはめて、たうどう新しい傳説まで造出したのであらう。それは兎に角、天孫降臨當時の大和言葉が、今なほ南島の方言中に遺つて、生きてゐるのは面白いことである。このサダルのお蔭で、オモロの一の卷の五の尙巴志の進軍を歌つたオモロ中にある「物知りはさただけ」(巫覡を嚮導として)の意味を説明することが出來、更に進んで國史中の疑義まで闡明することが出來たのは嬉しいことである。それから十の卷の二の開關のオモロに、「てだこ、うらきれて」といふ句があつて、日神が待遠しがりての意味をもつてゐるが、この外十四の卷の一四にも、「うらきらしや、おがて、かゞ、おらに」といふのがあり、十三の卷の一四三にも「大きみが、きみし、うらきれて」といふのがあるが、このうらきれてには、みぼしやこいふ註がつけてある。これは見たがるどいふことである。そしてこれは琉球の三十字詩には、「みぼしやうらきらしや」と熟語的になつて出てゐる。この言葉は琉球の標準語では、もう使はれなくなつてゐるが、國頭郡の方言及び奄美大島の方言では、まだ生きて活いてゐる。このうらきれるを國語でも語原の解けない難語の中に數へてゐる人もあるが、これは裏ど切るの二語の結合したもので、吾々の語感には少しも外國語らしく響かない言葉である。そして國語辭典中にもこれと類似の言葉が見出せるやうな氣がしてならない。試みに手近にある言海を引いて見ると、國語では、顔をオモテ(表)といふに對して、心をウラ(裏)といふ

場合がある。そしてこれからウラ淋シ、ウラ恥シ、ウラ悲シ、ウラモトナシ、羨む(心病ム)等が出来た。琉球語のうらきれるも恐らくかうして出来たのであらう。これにもご心切れるの義のあつたことは最早疑ふ餘地がない。さてかういふやうにして、語原の穿鑿に耽るのはおもしろいことであるが、それに拘泥すると、言語の意味を掴みこなふ恐れがあるから、この點について、私はなるべく臆病であるのが安全だと思つてゐる。前にもいつた通り、言語は絶えず變化する性質をもつてゐるから、語原がわかつたからといつて、必ずしもその語義が突止められるのではない。十一の卷の二九の君南風の讃歌中に、「人の、いちへて、おに、おどちへ」といふ句があるが、之を逐語譯して、人の出で、鬼をおどすとしては、その意味が全くわからなくなつて了ふ。出ちへては琉球語の慣用句で、でありながらさかくせにさか譯すべき言葉である。さうすると、この一句の意味は「人間のくせに鬼神をも威壓してマア!」といふことになる。十七の卷の一三に、「あこころ、いけぐすく、みらんすが、ほるび」といふ文句があるが、これも亦文字通り譯しては、意味が取れない。琉球語では、損することを亡ビエンといふから、これは名高い池城を見ない人は損だといふことになる。これでオモロを解釋するにあつて、現代琉球語の言語情調を無視してはならないといふことがわかる。中には當時の特別の言ひあらはし方であつたらうと思はれるので、現代語に類例のないものもある。柳田先生はかつて「もゝごふみあがり」には、百度も地べた

を踏んで跳上るといふ意味があつて、處女が始めて男子にあつた時の歡喜を形容する言ひあらはし方だから、玉依媛たまよりひめが幾人もゐたやうに、「もゝごふみあがり」も幾人もゐたらう、こいはれたことがある。私の研究は之を證明して上げるまでに進んでゐないが、「もゝごふみあがり」の解釋についての先生の卓見には敬服せざるを得ない。十四の卷の三三に、「さしきよ、ふみあがて、ちよわれ」といふのがあり、二十卷の二〇にも、「もゝご、あがり、ふみ、あがて、ちよわれ」といふのがある。これらは「もゝごふみあがり」を歌つたオモロ以外のものにはあらはれてゐるのであるが、やはり極度に歡喜せよといふ程の意味をもつてゐるのであらう。これには前にのべたあまへるがあらはす歡喜よりよりも、ヨリ強度の歡喜——手の舞ひ足の踏むところを知らないほどの歡喜——の意味があつたに相違ない。この外オモロには軽い歡喜をあらはすに、ほこりほこりといふ言葉が使つてある。「混效驗集」を繕いて、形容詞や副詞が今日のより非常に豊富なものを見ると、おもしろ人即ち古琉球人の感情生活は現代人のよりも、ヨリ繊細であつたことがわかる。以上は校正中に氣付いたことであるが、これからオモロの語法について述べることにしよう。

まづ動詞の語尾變化コンジユグイションのことから始めよう。國語の原形動詞は、四段活用に近いものであつたこと説が有力であるが、琉球語の活用はすべて四段活用のやうに活いてゐる。試みに ichun (行く)と

いふ動詞の活用を擧げて見ると、ika (將然形)、ichi (連用形)、ichun (終止形)、ichuru (連體形)、
 三三(已然形)、三三又は三三(命令形)といふ風になつてゐる。オモロでは、これがいか(將然形)、い
 き(連用形)、いく(終止形)、いく(連體形)、いけ(已然形又は命令形)となつて、國語のそれに近
 くなつてゐる。それから琉球語の係結は國語のそれに著しく類似してゐる。Ya, ya, nu の如き主
 格をあらはす亘爾波を受けて、終止法で結ぶのと ne (ど) といふ亘爾波を受けて、連體法で結ぶ
 のとがある。この ne (ど) は國語のぞに相當するもので、國語では文語にのみあつて、口語では
 見られ無くなつてゐるが、琉球語では今なほ規則正しく用ひられてゐる。オモロには、この外に、
 國語のこそ、に相當するす(轉じてしよ、じよ、しゆ、じゆ、ぢよ、ぢよ、となつてゐる)といふ亘爾波
 があるが、これで受ける時には、やはり已然形で結ぶことになつてゐる。どの例をあげると、
 けふふきよるかせや(今日吹く風は)
 どくかせどふきよる(毒風ぞ吹く)

のやうなものである。中には、(十三の一七四)

こぶとりる(飛ぶ鳥ぞ)
 はやぶさる(隼ぞ)
 かにある(新くある)

のやうに、どがるになつた例もある。二百年前に出来た「花賣の縁」といふ脚本には、

「朝夕波風の音ど聞きゆる

「中々にぎやかな所だやへる (daya-biru.)

といつたやうな形で出てゐる。中には連體形で結ぶ代りに、さらめといふ助辭で止めたものもある。
 すの例を擧げて見ると、

まよりもりぐすく(首里森城は)

ながえきよらおぐすく(永久に美しき城なるかな)

たりじよ上下どよめ(實にこそ上下擧りて謳はめ)

せの君しよ世はにせめ(我が王こそ國家を知ると召さめ)

のやうなものである。又

きみがなしきみの(尊き君なる)

あぢすしりよわめ(王こそ知るしめさば)

かみしもおそて(上下を襲ひて)

かなわしよわれ(大平を樂まじめ給へ)

といふ風なものもあるが、これは下にバの意があつて、直説法ではないが、それでも結びといふこ

とが出来よう。二百年前に出来た「執心鐘入」といふ脚本に、

約束の御行合やだにすまたしちやれ、

袖の振合せと御縁さらめ

といふのがあるが、四五十種もある琉球の脚本中で、この語法を使ったのはこれ一つである。琉球で始めて戯曲を作つた玉城朝薫がオモロの研究者であつたこともこれで能くわかる。この詞には、世の常の逢引きはなるほどやつて見たけれども、かう行きずりにあつて陥つた戀こそは、何かの因縁であらう、といふ程の意味があるから、これも亦前のオモロと同じ形式のものである。序でにこのだにすについて述べて置く必要がある。これはオモロに澤山ある語で、だに、げに、いつも對句になつて出で来るが、オモロの姉妹詩のくわいにや、やらしいにも見出だされるのである。オモロには、「これと眞の眞王やれ」とあり、くわいにやには、「だに給れ、實に給れ」と出でゐる。そして脚本にも、「御真人のまざれ誠よ聞きこめれ」(爾民衆よ、能く聞け)といふ使ひ方がしてある。オモロには、だにすといふ形はあるが、げにすといふ形は一つも見出せない。此島御國又は本國といふ意味の言葉に、だしま、だくに、だきよりと使つてあるが、このだも亦だにのだと同じのものであるやうに思はれる。三十字詩に、「名護の番所だんじよとよまれる云」といふ文句がある。このだんじよもだにすの遺物であらう。この掛結がオモロにのみあつて、尙真

王時代から琉球入時代までに建てられた琉球文の金石文にないのを見ると、これが散文で使はれてゐたのは、餘程古い時代であつたに相違ない。兎に角この語法はすたれて了つたが、だにすがだんじよとなり、これにかがくつついて、*danjuka* といふ副詞句となつて、今日の口語の中に生きてゐるのはおもしろい。吾々は今でもダンジュカアンヤル(なるほどさうだ——これは、したりといふ程の言語情調をもつてゐる。) といふ言葉を能く使つてゐるのである。かういふやうに、この語法は韻文を作る時のみ用ひられたので、後にはその本來の意義が漸次忘れられて、新しい意味まで生じて来るやうになつた。

「ごひやくさす、ちよわれ(千年もながらへかし、即ち萬歳の義)(八の三六)

「ごもゝすへ(千年も)

おぎやかもいす、ちよわれ(五の三一)

「おぎやかもいしよ、

すゑまさてちよわれ(五の六九)

「おもいぐわす(御子こそは)

ごひやくさよ、ちよわれ(五の四五)

「ごもゝすへ、ぎやめも、(千年迄も)

おぎやかもいしよ。(尙眞王こそは)

するまさて、ちよわれ(子々孫々繁昌し給へかし)(五の六九)

の如きは、希望若しくは命令をあらはすものである。これがすつと後になつて出て来た形ではなくて、尙眞王時代からあつたことは、右のオモロを見てもわかる。この形式は多分、

ともゝする

とひやくさすちよわれ(五の五二)

のやうなものからかはつて来たのであらう。語法については、もつと述べたいことがあるが、これ位のところで切上げて、音韻論に移ることとしよう。

琉球語の音韻組織も亦國語のそれと大同小異である。現代琉球語には、a・i・uの基本母韻があつて、e・oの二韻がない、兎に角五十音圖中で、エ列とオ列とは、影をひそめて、エ列はイ列に、オ列はウ列に、隠れてゐるやうな有様だ。(但、e・oの短母韻が全く無くなつてゐるのでは無い。その次に鼻音が單獨でやつて来る時には、時偶現れて来ることもある。例へば ten, den, ton, don, wen, men の如き場合である)。チャムバレン氏は日本語と姉妹的關係にある琉球語に、a i uの短母韻だけあつて、e・oの短母韻が缺けてゐるところから、古代日本語もさうであつたと速

断されたが、よし日本古代語の母韻には、a i uしかなかつたとしても、現代琉球語のそれをもつて、之を證明するのは、早過ぎるやうな氣がする。南島語に於て、o・eから来たところのu・iと在來のu・iとの前に子音がくつついて音節を作る場合の現象やオモロ又は金石文等の假名遣の有様などを調べたら、思半ばに過ぐるものがあらう。琉球の標準語では、ケ、ゲ、は、ki, gi, ki, gi, 子は ni, ni は nji, nji は、ニリは ni, ni となり、在來のiはいつも口蓋化した子音の後に來るやうになつて、而もこの場合にはいくらか口の開きが狭いやうな氣味があるが、宮古八重山の方では、ケ、ゲは ki, gi, ki, gi は ki, gi (kai, gi) セは si, si シは si, 子は ni, ni は ni, ni は pi, pi は pi (psi), ヱは bi, bi は bi (bzi), メは mi, mi は mi, ni は ni, ni は ni, ni となつて、エ列とイ列とがかつて立派に對立してゐた時代の跟跡を留めてゐる。琉球で國劇の盛んであつた時代に、役者は正しい發音をしてゐて、「胸に思染めれ」の如き詞を Muni nji umi sumiri と發音したこのことであるが、今でも五十四五以上の上流社會の紳士は、ni (子) と nji (ニ) とを立派に使ひかけてゐる。私はかつて古老からかういふことを聞かされたことがある。故護得久前代議士の祖父朝置翁の青年時代に、麻文仁按司といふ七十歳位の老人がゐて、當時の青年がクビ(壁)とクビ(首)との發音を混合してゐるのをこぼしてゐたことであるが、これで見ても、今から百年ばかり前には、イよりは少し開いた、エに近い母韻の存在してゐたことがわかる。先達而沖繩縣稻

嶺校の校長の島袋源七君がその著「山原の土俗」の稿本をもつて来て私に示したが、その中に琉球語の音韻研究上見逃すべからざるおもしろい材料があつた。同君が採集したオモリの中に、「しちゑ」（しての意）といふ假名遣が澤山あつたので、このちゑはどういふ風に發音するかと聞いて見たら、チに似て、チでも無い、もつと口が開いたものだ、といふのを聞いて驚いた。そしてそれでオモロの中にさらに出て来るちへ又はちゑの發音の正體がわかつたので面白いと思つた。それからoとuとの關係は、eとiとのそののやうに、判然してゐないが、コ、ゴが *ku, nu* になつて、ク、グが *chu, ju* になつたり、ロが *so* になつて、ルが *su* になつたりするところなどは、少しく注意すべき點であると思ふ。いゝ耳をもつて居られた田島先生は、o から來た u と在來の u との間には、いくらか區別があるが、主張して居られたやうに覺えてゐる。兎に角現代琉球語に e, o の短母韻が缺けてゐるのは事實であるが、長母韻 *e* が存在してゐることを忘れてはならぬ。その代りに沖繩本島では、二重母韻が無くなつてゐる。それは *ie* が *e* となり、*uo* が *o* となつてゐるからだ。けれども宮古八重山の方言に、二重母韻が立派に存在してゐるのは注意すべきことである。現代琉球語で長母韻になつてゐるところがオモロで悉く二重母韻になつてゐるところから見ると、沖繩本島でも、かつて二重母韻が盛んに使はれた時代があつたと推測することが出来る。

これからオモロの假名遣をさほして、古代琉球語の音韻を瞥見して見よう。オモロは大方の人が考へるやうに、琉球最古の文獻ではない。「おもろさうし」の第一巻が出来ると同時に琉球文で書かれた二つの金石文が建てられたことを知らなければならぬ。左にオモロ結集の前後に出来たこの種の文獻を時代順に並べてみよう。

たまおどんのひのもの	弘治一〇	文龜	元	西曆一五〇一
またまみなごのひのもの	嘉靖	元	大永	二 同 一五二二
おもろさうし第一巻	同	一	天文	元 同 一五三二
かたのはなのひのもの	同	二	二	同 一五四五
漆織御門の南のひのもの	同	二	五	同 一五四六
やらざもりぐすくのひのもの	同	三	二	同 一五五四
浦添城の前のひのもの	萬曆	二五	慶長	二 同 一五九七
おもろさうし第二巻	同	四	一	同 一六一三
ようどれのひのもの	泰昌	元	元和	六 同 一六二〇
おもろさうし第三巻以下	天啓	三	同	九 同 一六二三

これらの金石文は、「琉球國中碑文記」に集められてゐるが、而も*を附したものを除くの外は、

今なほ石碑も立つてゐるのだから、三四百年前の散文の見本として、實に得難い資料といはなければならぬ。そしてその假名遣がオモロのそれと全然同じもので、オモロが幾度か寫改めた間に誤字を生じたのに反して、これは石に刻込んだのだけに、可なり信用し得べき性質のものである。この外琉球産業界の恩人と稱せられる儀間眞常の後裔なる首里市の田名家に、その祖先が、大永三年(明の嘉靖二年)たから丸の官舎くわんしやとなつて、支那へいつた時に、貰つた辭令を筆頭として、近代に至るまでの琉球文で書いた辭令が遺つてゐるが、これも亦見逃すべからざる好資料である。吾々はこの古文書とあの金石文とをオモロと比較することによつて、古琉球に於ける散文と韻文との關係をもかいまみることが出来るのである。

オモロ及びこれらの文獻は、記紀萬葉に比べると、遙に後世のもの——室町時代より徳川の初期に至る頃までのもの——であるが、伊東博士等の研究によつて、この時代の琉球の寺院の建築に、飛鳥時代の様式がほのみえてゐるやうに、これらにも亦王朝時代の色とかをりこが現はれてゐるのである。現代琉球語には、エ列とオ列とが無いのに、オモロをあらはすにエ列オ列の平假名を用ひてゐるのを變だと思ふ人があるかも知れないが、この疑問は南島語の音韻變化の激しい現象を目撃したら、容易く解けて了ふのである。前にも述べた通り、宮古八重山の方言及び國頭郡の一部の方言では、イ列とエ列との間に差別があり、琉球の標準語に於ても、百年前までは多少の

區別があつたやうだから、四百年前オモロを平假名で寫した時代には、もつと判然はつきりした區別があつたやうに思はれる。琉球人が平假名を使用したのは、鎌倉以前に溯ることが出来るから、二國語の母韻の價値に餘り間隔の無かつた時代には、彼等は大した苦心なしに、自國語を寫出したであらう。そして彼等の子孫は、之を襲踏して今日に至つたと見ることも出来る。けれどもこれには別に文獻の徵すべきものがないから、これ以上臆測を逞うすることは出来ないが、兎に角當時イ列とエ列が全然同一のものであつたとすれば、エ列を用ひずに、イ列を使つたであらうに、兩方の使ひわけをしてゐるところから見ると、當時兩方が存在してゐたことは確である、たゞこのイがイに近かつたか、エに近かつたか、その中間に位してゐたかは、はつきりわからない。オ列とウ列についても亦同様なことがいへよう。ところが中には、おをうと書いたり、至つて稀にうをおと書いたところもある。一例を上げて見ると、オモロに、婿むこをもこと書いたり、崇元寺の下馬碑(明の嘉靖六年)に、こま(此)をくま(此)と書いたりしたやうなもので、萬葉にこがね(黄金)をくがねと書いたり、むこ(婿)をもこと書いたりしたのと同じ現象が見られるのは面白いことである。その外によ(世)をゆ、しも(下)をしむ、よろひ(笠)をよるいとした例もある。このエ列とオ列とは彼等が北方の同胞と袂を分つた頃から、變化し始めて、たうどうイ列とウ列とに合して、區別し難きまでに變り果てたのであらう。

オモロの假名遣を調べてみると、いろいろの疑問がおこつて来る。ワ行についていふと、wが母韻の前に附いて音節を作る場合に、今日の國語には、ワ(wo)だけしか遺つてゐないのに、琉球語には、ワ(wi)、キ(ke)、ウ(wu)、エー(ee)、ヤー(ya)と全部揃つてゐる。然るにオモロでは wonari (姉妹) をあらはす場合に、十中八九までは、おなりと書いて、をなりと書いたのは一つ二つしかない。(けれども wokeni 兄弟はちやんとおけり、と書いてある。又 more といふ神職の名をあらはすには、ワ行を用ひずに、あおりやへ又はあおりやゑとしてある。これは一體どういふ譯であるか。思ふにそれは當時の琉球人に五十音韻の素養がなかつた罪ばかりではなく、ヲの古音を失つて、長い間オとヲとの所屬をきめることが出来なかつた倭人が、五十音圖を南島に傳へたにもよるだらう。ヤ行についていふと、國語では、イ(ie)はア行のイ、エと同一のものになつてゐるのに、琉球語には、yi と ye とが存在してゐる。そしてこの yi と ye とをあらはすに、オモロでは、い(ie)と用ひないで、ゐ(ie)と用ひてゐる。これ亦どういふ理由であるか。現代では、wun (居る)、wutuku 又は wikisa (男)、wumun (雄)、winagu yinagu (女)、wutu (夫)、wiyun (折る)、wi (甥)、wujasa (叔父)、wubama (叔母)、wiyun (剣る)、wiyun (酔ふ)等は、何れもワ行で始まつてゐる語であるが、オモロの假名遣では、ア行とワ行とが混同してゐる。中には、「さげや、ゑよてど、たちよる」(酒には酔ふてぞ歸る)といふ風に、正しい使い方をしたのもある。

それからゐり(居たり)と書いたのもあるが、このゐを oi と發音したかは疑問である。現代語では、oi になつてゐるから、オモロ時代にも多分さうなつてゐたかも知れないのである。ゑ、おは ye, mi と發音する場合と、ye, yi と發音する場合と、二通りあることを知らなければならぬ。吾々琉球人が普通語をあやつる場合には、e, i は ye, yi としたが、かういふ傾向は、おもろ人の場合にもあつたと見なければならぬ。して見ると、ア行のエや、ヤ行のエは、もつてゐながら、オモロにえを用ひないで、ゑを用ひた理由もよくわかる。それからオモロには、わちへ、ちよわちへ、いちへ、など、ちへがざらに出て来るが、このへは國語の豆爾波のへ、まへ(前)、候へなどのへが、エと發音するところを見て、エの代用をさせたもので、これがちにくつつくと、che と發音したのである。今なら單にちと書くべきところである。オモロには、促音をあらはす時には、たちちへ(立つて)、うちちへ(打つて)、てうらちゑ(手を打つて)など、子音を二つ重ねるやうになつてゐる。

P音のことは、拙著『古琉球』に書いて置いたから、こゝでは述べないことにするが、豆爾波の pi が pu に變ることについて少々述べておこう。オモロには、うたは(打たば)、やれは(なれば)、みおやせは(奉れば)、なよれは(踊れば)、おい人にとゑは(五の五七)などのやうに、濁音でないはが使つてあるので、校訂の時私は古格に従つて、最初ばにしたが、中におい人にとゑわ(十二

がせぢごよむせいくさがふし」といふのがあつて、**大き**が**大**ちみになつてゐるところから見るに、此頃既にカ行の口蓋化が行はれてゐたことが推測される。袋中が神道記五卷を書いたのは、その「琉球往來」によると、慶長八年であるから、この頃にはたゞオモロの第一卷があつたのみで、二卷以下はまだ出来なかつたが、彼の言によれば、彼はかなりのオモロを覚えてゐたやうである。オモロ双紙中には、この御唄そのまゝのは見出せないが、初の三行は六の卷の二四と二十二の卷の四四に出て居り、以下は一の卷の一四と三の卷の四五とに稍々似たのが出て居る。この頃までオモロの異本が澤山あつたことは、かういふところからでも證明することが出来よう。

終りに、私は支那人の琉球語研究のことを述べて、この稿を終らう。新村博士は、かつて「藝文」誌上に、「南島を思ひて」といふ一篇を掲げられて、拙著「古琉球」を紹介されたことがあるが、その結末のところ、琉球語の音韻變化を研究するには、明朝から清朝にかけての支那人の琉球に關する研究を一瞥する必要があるとの注意を與へられたことがある。其後東條操氏は「南島方言資料」を編纂され、その附録として、中山傳信録音韻字海華夷譯語琉語對照と音韻字海篇類編海篇正宗琉語校異とを出されたが、私は之を播いて、オモロの音韻に關する幾多の疑義を闡明することが出来たやうな氣がする。之を述べる前に、重なる三書の時代を明にして置く必要がある。中山傳信録は、康熙五十八、九年（西曆一七一九—二〇）冊封副使徐葆光の著であるが、その中に收

めた琉球語は著書が自分で採集したものでないらしい。華夷譯語は、萬曆の進士朱子蕃、茅伯符兩人の手になつたもので、安南河内の東洋學院のオールソープ氏によれば、萬曆八年（西曆一五八〇）頃のものであるといふことである。それから音韻字海は、明の周鍾等の編で、新村博士は萬曆初年を下るまいといはれたことである。新村博士もいはれた通り、寫音した蒐集者が閩人であるか北人であるかに由つて、その琉語の讀方も大に異なるわけであるが、どちらにしても、寫音して以來、支那音自身も變化してゐるだらうから、その變遷の經路を熟知した上でなければ、それを利用して、琉球の音價を定めるのも艱難な業でなければならぬ。先づ華夷譯語に、帶を乞角必としたものから調べて見よう。乞角必は *ikihi* で、國頭郡の方言では、今なほさういつてゐるところがある、所によつて、*kikihi* といふ所もあれば、*ichihiki* といふ所もある。オモロには、十の二四あがる三日月がふしに、「**ゑ**、**け**、あがる、のちくもは、**ゑ**、**け**、かみが、まなき、おび」と出てゐる。その他「たれき、おび」（十三の一八二）といふことも見えてゐる。三四百年前には、琉球の標準語でも、帶をさういつたことがわかる。同譯語に、賞賜又は給賞を非近的としてあるが、これは *ikihi* と、讀むだらう。オモロの十五の五四に、「おれど、ひきいぢへ、物」とあるが、それは引出物の義である。現代の琉球語では、*ichijimun* をいつてゐる。ついでにいふが、支那音には濁音がない爲に、外國語のそれをあらはす場合には、清音の前に鼻音 *n* で終る音をもつ

て来て、後に来る音を濁る約束を設けてゐるらしい。これは同譯語に、硯を孫思立、鞋 *sa ba* を三扒、金 *kugani* を孔加尼、水 *mi zi* を民足、右 *mi jiri* を民及立、謝思 *mi bu kuri* を密溫普姑立といふ風にあらはしてゐるので能くわかる。他の二つも同じやうなあらはし方をしてゐる。譯語に、鮮魚を必撒莫只としてあるが、これはとりもなほさず *nshannuchi* で、「混效驗集」には、「むしやもち、魚類をいふさかななど云が如し」とある。尙家あたりでは今なほさういつてゐると聞いてゐる。天を傳信録に、町 *mi* としてあるが、他の二つには、旬尼 *mi* としてある。オモロでは十中八九までは、てに、と書いてある。前に述べた嘉靖三年の儀間文書にも、官舎をくわにしやと書いてある。金武村のオモリにも、「てに、が上」にのぼて云々といふのがある。方言で今なほさういつてゐる所がかなりある。それから譯語には、錢を熱尼(勢尼の誤か) *ni* としてあるがそれが今の方言にもこのつてゐる。これで見ると、古琉球人には、*n*(ン)を發音することが困難で、*i* を附して *ni*(ニ)と發音したことがうかがはれる。現今大根を *u ki ni* といふのは、古琉球の面影を見せた發音法である。竹をあらはすに、傳信録では、托凡、音韻字海では達急、譯語では達及とし、譯語で刀をあらはすに達只 *tu chi* 言語をあらはすに姑只 *ku chi* としたところを見ると、支那人は琉球語のけ、又はきをあらはすに、凡、急、及等を用ひ、ちをあらはすに、只を用ひたことがわかる。譯語に、多少を亦加撒 *ni ka sa* としたのは、面白い例である。今日標準語では、

如何を *cha*、如何程を *cha sa* といひ、脚本では、如何が、如何しと書いて、*icha ga, ichashi* と讀ませてゐるが、オモロには、「かつれんは、いきや、かつれんが云々」(十六の二一)と出てゐる。このいきや、を韻文を朗讀する場合にのみ *ikya ru* と讀ませたばかりでなく、明末までは口語の場合でも、同様に發音したことが明白になつて来る。宮古八重山及び久米島糸満を中心とした地方を除く外の沖縄の方言には、ワ行のワ(*wa*)、キ(*ki*)、エ(*ei*)を咳をする時に出る音の稍々軽いものを前にくつ附けて發音するのがある。チャンパレン氏はこの子音をあらはすに *mi* を以てしたが、これは萬國音標文字の *w* を用ひて、*w* とした方が適當である。否印刷の便宜上、*Jespersen* に従つて、*w* とした方がいゝかも知れぬ。(この外に *y* 及び *n, m* もあるが、こゝでは必要がないから省くことにする)。二三の例をあげて見ると、*wenchu*(鼠)、*mi*(上)、*wa*(豚)等の如きものである。今日の發音方によると、オモロのみおやせ、おやぐに、のおやは、*mi* と發音し、おい人、とまちどおゑたて、あかのおゑつきのおゑは、*mi* と發音すべきものであるが、おもしろ人が果してさう發音してゐたかは疑問である。上を傳信録に威としたのを見ると、二百年前には *w* があつたやうに思はれるが、音韻字海と華夷譯語とに、吾セ、烏セ(*mi*)としたのを見ると、オモロ時代には、この *w* はまだ發達してゐなかつたやうに思はれる。多分 *mi* が *mi* に變つたのも *mi* や *mi* が *mi* に變つたのと同時代であつたらう。以上述べたところを總合して考へて

531

31

終

